

子作り禁止の政略結婚なのに、意地悪王子が  
じれじれ♡乳首開発をやめてくれないので  
そろそろ我慢の限界です！（お互いに）

## プロローグ

黄金に輝く瞳は、当時十二歳だった私を容易く射抜いてきた。

晩餐会に相応しい、きめ細やかな大理石の床に足が縫い付けられたのを覚えている。

「お久しぶりです、テオドール様」

瞳の持ち主に、お父様が声を掛ける。足が動かない私はお父様に背中を押され、やっと一歩が踏み出せた。彼の目の前まで歩み寄ることができ、次第に瞬きの存在についても思い出す。

「先の国境制定以来ですね」

自分の体に戸惑ってはいしたが、お父様の言葉には些か苛立った。とても穏やかに言うけれど、「先の国境制定」と言えば、我が国・ティ

ニアースの領土をフォーリッツ国に奪われた、忌まわしいとも言える出来事だ。

隣国が戦争の果てに征服され、その煽りを喰らった形だった。

「そうだったか？」

この男——テオドール・フォーリッツの率いる第一王子軍によって。

「一年経たないくらいでしょうか。一層逞しくなられて、フォーリッツ王はご安心されていることでしょう」

自身も王ではあるが、お父様はそれを振り翳したりはしなかった。

だからこそ余計に苛立つてしまう。未だ王子という地位にいる彼に、こんなにも無礼な対応をされているというのに。

（少しはチクツと言ってやればいいのに……）

「こちらは、娘のリイリアです」

密かに「チクツと言うなら」の具体例を考えていたら、背中をポンと押されて一瞬焦った。けれど、それを顔に出すわけにはいけない。ドレスの裾を掴み、恭しく頭を下げる。

「お初にお目にかかります。ティニアース王国の第一王女……」  
リイリア・ティニアースです。

そう続けようとした瞬間、彼は大理石の床に低い声を落とした。騒がしい会場でもしつかりと聞き取れたのが、自分でも不思議だった。

「鉛色」

「……はい？」

（なまりいろ？）

社交の場ではあまり聞かない単語に思わず戸惑った。咄嗟に顔を上げると、彼は続けて言う。黄金の瞳が、私を見下ろしていた。

「貧相な色だな。濁って見える」

「は……………」

彼の瞳は、私の瞳の色を見ていた。つまり、彼はこう言いたいのだ。

「お前の瞳の色は汚い」と。

ティニアースでは、この瞳の色は王族の色とされている。だからお父様は「白銀の王」と呼ばれているし、代々続く敬称でもあった。

それを、この男は。

侮辱でしかない物言いにカッとなったのを、隣のお父様は私以上に分かっているようだった。すぐに「リイリア」と私に声を掛けただけで、私はすでに彼の金色の瞳を睨みつけてしまっている。自力でも他力でも、止まることは到底無理だった。

「ありがとうございます、テオドール様」

けれど、カッとなったからと言って、品位を損なってはいけない。

慇懃無礼な声色も、生まれてから何度も練習させられた笑顔も、私にとってはもうお手のものだった。

「我が国では『白銀』と評されておりますが、鉛もまた静かな輝きを持つ金属ですので、とても嬉しく思います」

「は？」

社交界らしい、チクツとした皮肉だつて同じこと。

「『眩いだけの色』では……些か氣品に欠けますものね」

しっかりと皮肉を返した私に、彼の眉毛と黄金色の瞳が歪んだ。

正直氣分が良くて、もう一つしっかりと皮肉を言つてやる。先に仕掛けたのはあつちなのだ。

「鉛は人体にとって有害ですから、テオドール様に何かがあつては申し訳が立ちません。私はここで失礼した方がよろしいですね」

「リ、リイリア……」

「お父様、失礼致します。ああ、テオドール様におかれましては……どうぞ、ご自愛なさってください」

ドレスを翻し、彼に背を向ける。背後ではお父様が「申し訳ありません、まだ十二の小娘で……」などと謝罪しているから、帰ってから叱ろうと思った。

一国の王たるものの、あんな無礼で品のない王子なんか容易く頭を下げるものではないのだ。



「すまない……リリイ」

お父様が白髪混じりの頭を静かに下げる。

あれから十年経ち、私の興入れが決まったからだ。しかもよりにもよって『あの男』の元に、である。

「謝らないで、お父様。何も問題ないわ」

建前でもなく、本心だった。少し増えた白髪に思わず苦笑してしまふ余裕があるくらいだ。

いくら相手が彼であろうと、私の覚悟はとうに決まっている。生まれた時から、私は国のために生きる運命である。今に始まったことでもない。

「……もちろん、これは形だけの結婚だ」

「ええ。事情は分かっているつもりです」

軍事国家であるフォーリッツ王国は、数年前からその勢いを増した。現王が病に侵されたという噂はどうやら本当らしい。おおかた、



死ぬ前に国を大きくしたいと独裁者らしい考えを持っているのだらう。

フォーリッツ王軍は順調に領土を増やし、ティニアース国にもその手が迫っている。和平のためお父様がフォーリッツに赴いたところ、この政略結婚の話が持ち上がったのだった。

「あちらは、ティニアースの資源が目当てでしよう？」

自然豊かな国土を破壊されることはもちろん望んでいないし、私たちは民のことを何よりも考えなければならぬ。

それが王族としての務めだと、私は他でもないお父様から学んだ。だから不満は何一つ感じていなかったけれど、王でもあり父親でもある彼は誠実にも私の人生を憂いているらしかった。

「……フォーリッツ王は、ティニアース王族の血を混ぜることはないと言っていた」

「徹底してますわね」

苦笑するしかない。王族のみ一夫多妻が許されているフォーリッツ国だから言える言葉だろう。「資源確保のために他国の王女を娶るが、後継は自国で見繕う」という宣言に他ならなかった。

「感心するほど合理的です。お父様も、少しばかり見習ってほしいくらい」

「リリイ……」

心から優しい父をチクリと言葉で刺せば、彼は困ったように笑った。けれど、すぐに真剣な面持ちに変わる。

「言うまでもなく、肩身の狭い思いをすることになる。もし本当に耐えられなくなったら……」

耐えられなくなったら。

その後に続くであろう言葉を、私は「大丈夫です」と遮った。

「耐えられない」などと弱音を吐くつもりは毛頭ない。大陸の隅にあるこの小さな国を、王族を、私を、ここまで何不自由になく育てくれたのは他でもない国民たちだ。

彼らのために、私ができることは生まれた時から決まっている。

「何があろうとも、私はティニアース国の王女として、理不尽に屈したりなどしません」

その時は、本気でそう思っていた。——だというのに。

「声が漏れてるぞ、リイリア」

「ツ……♡ あっ……ふ……っ♡」

それから一週間経つ頃には、悔しいことに私はもうほとんど屈してしまっていた。

「政略結婚した男に乳首弄られてよがってるなんぞ、誰にも知られた

くねえだろ？」

この傲慢な夫——テオドール・フォーリッツに。

「ひ……っん……♡　だ、め……ッ……は……あ………♡」

背中側から抱きしめられて身動きが取れない私の乳首を、彼の長い人差し指がカリッ♡カリッ♡カリッ♡と引っ搔いてくる。

じわあ♡と熱い股が疼いて仕方がない私は、モジモジと膝を擦り合わせながら鳴いてしまっていた。コントロールできない体に、いつだっと思考が乱される。

「だめ？　そう言う割にはなんだ？　このピンピン♡した勃起乳首は」

馬鹿にしたような口調で言う彼は、勃起しきった乳首をきゅむ♡と摘んだ。両方の乳首を虐められると、背中が反って声が出る。

「あッ、ん♡」

「声抑えろつつってんだろ」

「んう……っ♡」

無理やり彼の方を向かされて、口内に舌を入れられる。

「……ッ……ん……♡」

静かな部屋に、くち♡くち♡と湿った音がよく響いた。印象以上に柔らかい舌に襲われていると、彼の指が今度は乳首の周りをくるっ♡くるっ♡と周り始めた。

「あッ……ふ……んっ……♡」

「たったこれだけで腰がへこへこと……王女様には少し刺激が強すぎたか？」

くるう……っ♡　くるう……っ♡

テオドールの指が、私の乳輪をゆうつくりと回る。その様子を見下ろしながら、私はさらに息を荒くさせた。

(あ♡ 焦らされてる♡ 乳首、焦らされてる♡♡)

背後にいる彼から顔が見えないことをいいことに、指先を凝視した。すると彼の太い指は、乳輪の下の方をかりっ♡かりっ♡と引っ掻いてくる。

「あッ……あっ……♡」

「ここがイイのか？」

(違う♡ もつと上♡ 上がイイのに♡♡)

そう思っても口にするわけにはいかなかった。口にしたらそれこそ完璧に屈することになってしまう。体が屈してしまっても、せめて、心だけは。

「それとも、こっちか？」

テオドールの指が、乳首の真上にやってくる。飼い慣らされてしまっている体はその絵面だけで子宮を小さくさせた。

つん♡と上を向く乳首の真上で、彼の中指が揺れる。そのまま降りてくれば、乳首をくりくり♡と倒されるような仕草だ。想像すると私の乳首はパンパン♡に腫れて、痛みさえ感じるくらいだった。

「あ♡ あっ♡」

「声」

「ッ……♡」

期待に満ち溢れた声が漏れてしまつて、すぐに窘められた。慌てて唇を結ぶと、テオドールは言う。

「下品な声出しやがつて……何を期待してんだよ」

言いながら、彼の中指は私の乳首の真上で尚も腰を揺らすようにカクカク♡と動いていた。いやらしい。けれど、待ち遠しい動きだった。

（だって♡ 絶対来る♡ 絶対もうちよつとで、乳首の先っぽ触って

くる♡ 意地悪だから♡ この人は、意地悪だから♡♡)

情けない思考だけれど、止められなかった。それくらい私の体はもうテオドルによって順調に快楽を覚えていつてしまう。

彼の指の先がどれほど気持ちいいか、体が学習してしまっている。

「リイリア」

「ッ♡」

耳元で名前を呼ばれ、肩が震えた。同時に、乳首の先つぽをぐりぐり♡と胸の中に押し込まれる。思いがけない快感に追い打ちをかけるように、胸に沈んだ彼の指がぐにぐに♡と蠢いた。

「~~~~ッッ……♡♡ おっ………ぐうッ……♡♡」

びくんっ♡と腰が大きく跳ね上がる。軽く達してしまった体に、私が一番混乱していた。

(名前呼ばれて……乳首潰された、だけなのに……っ♡)



「ハッ、たったこれだけで甘イキしてんじゃねえよ」

「ひあ……ッ♡」

叱りつけるみたいに乳首をキュッ♡と潰される。甘い声が出てしま  
うと、彼は背後でフッと笑った。

こり♡こり♡と摘んだ乳首をこねられる。

「次の予定までまだ時間がある」

「あッ……ん………は♡」

「もう少し、このはしたない乳首を叱ってやらねえとな？」

「あう……ッ♡♡」

乳首をこねられ、辱めを受けているにも関わらず、私の下腹部はじ  
んじん♡と熱く疼いていた。男性のモノなどまだ受け入れたことがな  
いの、背中に感じる彼の怒張が自分のナカに入ってくる想像をして  
しまい、何も知らないはずの膣がきゅうん♡と小さくなる。

(なん……で………っ♡)

「リイリア」

不必要に私の名前を呼ぶ彼の声で、じゅん♡と愛液が溢れた。余計に下着が濡れ、バレていないはずなのに恥ずかしくなる。

(こんなことに、なるなんてっ………♡)

フォーリッツ国に興入れをした日、この部屋に来ることは一生ないだろうと思っていた。それなのに、私はすでに彼の部屋の香りを覚えてしまった。この香りを嗅ぐと、たちまちお腹の一番底が震えるくらいだった。

## 第一章

「こちらがリイリア様のお部屋です」

フォーリッツ国にやってきた初日、案内されたのは豪華絢爛極まりない一室だった。

明らかに一人用のその部屋には、出入り口のほかにもう一つ扉があった。こちらにも豪華に装飾がなされている。だから、すぐに「彼の部屋」へと繋がっていることが分かった。取り立てて騒ぐことはない。寝室が繋がっているのは、国の両親も同じことだった。

（使うかどうかは、別として）

観察がてら部屋を眺めていると、テオドールの執事であるアランは天井から垂れている紐を手にとった。白銀色の糸で編まれている。

「何かお申し付けの際は、こちらの紐を。使用人部屋のベルに繋がっております」

アランは、終始無表情で穏やかな声だ。何一つ変わらない調子で、今度は隣にある小さなベルを手のひらで示した。黄金色である。

「こちらのベルが鳴りましたら、テオドール様のお部屋へお入りください」

「……」

「まあ……よほどのことがない限りは、鳴らないかと思いますが」

私が無言だったからか、彼はそう付け加えた。慌てる仕草が一切ない、訓練された執事である。

（鳴ったら、ね）

私の部屋から、「テオドールを呼びつけるため」の仕掛けはないようだった。あまりにも一方的で、男尊女卑だ。軍事国家らしいと思っ

た。

（加えて、初日だと言うのに当の本人は不在……）

急用のため友好国へ発ったという話だが、乱暴に言えば舐められているのだろう。

当たり前だけれど、私は心の底から受け入れられているわけではないのだ。彼からも、この国からも。

（でも、こつちだって）

密かに反骨精神を燃え上がらせていると、アランは言った。

「テオドール様は本日中に戻る予定です。少し遅くなるようですが、戻られた際には共にお夜食を……」

「結構です」

「え？」

「遅くに戻られるなら、テオドール様もお疲れでしょう。また明日、

ゆつくりご挨拶させていただきます。そのように伝えてください」

無礼な小娘だと思われても構わない。目には目を。齒には齒を。

あちらがその気なら、こちらもそれ相応の態度をとらせてもらおうというものである。

嫁入り初日に、こんな扱いをしてくるなんて。

「……承知いたしました」

今まで冷静だったアランが、不自然な間でそう答えた。その一秒間だけで少し気が晴れた気がする。

あの男にも、この調子で何かを食らわせられたらいいのに。



ボタンツ ドンツ…… ドン……

「……」

その日の深夜は、豪華絢爛な調度に全ての音を吸い込まれたのかと思ふくらい静かだった。

あからさまに人の気配を感じた私は、読んでいた本を静かに閉じる。

（……帰ってきた）

何をしているまでは分からなかったけれど、微かな音から乱暴な動作は感じ取れた。

サイドテーブルに置いた時計を見る。キャンドルに照らされた時刻は、いつもの就寝時間を少し過ぎていることを教えてくれた。

（私もそろそろ、寝………）

チリンチリンチリンッ

「ッ、ひえ……っ!？」

サイドテーブルに本を置こうとした瞬間、例のベルが軽やかに鳴った。夜中に聞くには些か心臓に悪い音だ。バクバクとうるさい胸を、ゆつくりとさする。

「……?」

(これは……「部屋に來い」……と? こんな夜更けに? いや、でもまだ間違えたという可能性が……)

すぐさま動く勇氣がなかったから思案するけれど、悠長な思案は許されなかった。

チリンチリンチリンチリン!

「っゝゝ!?」

「早く來い」と言わんばかりにベルが揺れる。



「ちよ……つもう……！」

けたたましい音に焦り、左右に揺れるベルを思わず手で止めてしまった。同時に気づく。ベルの音を無理やり止めてしまったのだから、私がこの部屋にいるということが今ので完全にバレてしまった。

（居留守はできない……！）

当たり前だけど、寝る間際だから私を守るものはネグリジェ一枚だけだった。こんな薄着、家族と使用人以外に見せたことがない。無意識に唾を飲み込んだ。

（でも……怖気付いたなんて思われたくない）

大体、この結婚において同衾は「禁止」と言っても全く過言ではない。彼の父親、フオーリッツ国王がはつきりとそう言っているのだから、同衾は求められないはず。そういう契約のもと私はここにいるのだ。

重ねて言えば、だ。

（私を抱くなんて選択肢は、彼にない）

初めて会った時の、射抜くような瞳を思い出す。あの瞳に、私は無礼な言葉を存分に返したのだ。自分で言うのもなんだが、そんな生意気で可愛くない女を誰が好き好んで抱くだろうか。

「……よし」

ふうつと覚悟のため息をついて、髪の毛を手櫛でさつと整える。頭の上から糸がピンと張っているかのように、背筋を伸ばしてベッドを降りた。

（私は、ティニアース国の娘）

しっかりと切り替えができたから、真っ直ぐと扉へ向かう。

こん、こん、と控えめにノックをすると、すぐに低い声が「入れ」と私を促した。少し固い動作で、ドアを開ける。

「失礼いたし……」

「遅え」

「……」

偉そうに宣う彼は、偉そうに片膝を立ててベッドの上でふんぞり返っていた。嫁入り初日の妻を待たせた挙句、夜中に呼び出した人間とは思えない。

（そういう人つていうのは分かってたけど……）

変にへりくだる気はなかった。事実だけを、毅然とした態度で伝える。

「……ご挨拶は明日に、とお伝えしたつもりでしたが」

「随分と礼儀も品性もない振る舞いだな。それでも王女か？ お里が知れる」

「ど、どつちが……！」

「あ？」

「~~~~ツ……いえ」

カツとなつてしまつたけれど、どうにか飲み込む。

この男が無礼なのはいつものことだ。初対面から知っている。あの日に限らず、どの晩餐会でも彼はこのような物言いだつた。

（挑発に乗っちゃいけない）

何よりも、愛する国の平和のために私はここにいるのだ。大人になれ、リリイ。今になつて偉大に思う父を思い出せ、リリイ。

「……無礼な行動でした。大変申し訳ありません」

「ハッ、思つてもねえくせに」

大人としての謝罪を鼻で笑われて苛立つた。

もちろん「申し訳ない」なんて芯から思つてはいない。でも、これが私の仕事だ。十年前、今よりも少年らしさが残るこの男にお父様が

頭を下げたように。

(舐められず、且つ波風立てず……!)

綱渡りをするような気持ちの私に反して、彼はペースを崩さなかった。

ベッドにふんぞり返ったまま、しれつと言う。

「来い」

「……はい？」

(来いって……え？　ベッドに?)

「有り得ないだろう」と思っていたことを言われて、思わず目が丸くなった。彼は表情を崩さないまま重ねる。

「早く」

「……!？」

今度はしっかりとベッドを指差されたので、余計に混乱した。

(同衾は、しないはずじゃ……！)

抗議をしたかったけれど、目が合うと言葉に詰まった。

またこの目だ。金色の、射抜くみたいな。

(と、とりあえず波風立てないように………)

彼の言葉を一蹴して、国に対して変ないちやもんをつけられても困る。

ひとまずベッドまで歩み寄った。すると彼は、私を一瞥して憮然とした表情で言う。

「俺を見下ろす気か？」

「っ……」

分らない。どうしたらいいか。だからと言って、ベッドに入り込むのも絶対おかしい気がする。けど、そう思う私がおかしいんだろうか。

「失礼……します……」

恐る恐る、ベッドに腰掛けた。やたらと柔らかいマットに沈み込む。内心、「これで本当に合ってるのだろうか……!？」と混乱のオンパレードだった。

彼——テオドールは、そんな私の様子をベッドに寝転んだまま眺め、挙げ句の果てに笑っていた。

「珍しい顔だな」

「っ……だって、その……」

「『同衾は無し』だと言いてえんだろ？ 国に方針にわざわざ逆らつてまで面倒起こすつもりはねえよ」

「え……」

驚いて、彼の方に目を向ける。「じゃあなんで私を呼びつけたんだろう」という疑問で一杯になっていると、目が合った。笑われる。

「寝る前に奥方の顔を見て何が悪い？」

（うええ……!?）

頭の中で出た変な声を、口に出さなかっただけ偉いと思う。けれど、突発的な体温まではコントロールできなかった。顔に熱が集まっていき、赤くなってしまうているのが自分でも分かった。

さらに恥ずかしいのが、それを見てテオドールも目を丸くするのだ。笑われた方がまだマシだった。

（こ、こんな展開考えてなかったから頭が……!）

思考が追いついてくれなかった。思考をしようと焦れば焦るほど何もまとまらなくて言葉が出ずにいると、テオドールの方が先に口を開いた。

それがまた、信じられないような台詞だったのだ。

「……同衾はだめでも、キスくらいはいいんだろう？」



「へっ？」

ギシ、と柔らかいベッドが彼の動きで沈む。彼の台詞の意味を理解し終える前に、彼の腕が伸びてきた。そうしてあつという間に後ろから抱きすくめられ、気づけば間拔けな声を出してしまっていた。

「は、はい……!？」

私と同じようにベッドの淵に腰掛けた彼は、長い足の間に私を収納した。腕ごとすっぽりと収められて、息が詰まる。

お父様以上に、大きい体だった。自分とは違う肉の質感と体温に、心臓がドキドキとうるさい。

「な、何を……っ!？」

「ちっさ」

（何これ、何これ、何これ……!）

馬鹿にするわけでもない声で感想を言われ、その意味も分からずと

にかく焦る。逃げてもいいものかと思うけれど、そもそも彼の力が強くて逃げられないと思った。力を入れてないように見えるのに、これが、『男性』。

「リイリア」

「ッ……!? ひ……ッ」

耳のすぐ後ろで名前を呼ばれて驚いていると、その隙に髪の毛を掻き分けられてうなじにキスをされた。

そんなところにキスをされたことなんてもちろん初めてで、微かにかかる熱い吐息と知らない感触に、ゾクゾクと何かが背中を走って行った。

（なんで……なんで……っ！）

どうして、この人が、こんなことを。

混乱に次ぐ混乱だ。そんな私に配慮してくれないテオドールは、余

裕そうな声のまま言った。

「いい声出すじゃねえか。煽ってんのか？」

「ち、ちが……っ！」

「お前ほどの女なら当然だが……反応からして生娘だな」

「ッ……」

一国の王の娘だから、彼が言うように当然処女だ。だからどうしたと言いたくなるが、間髪入れずに付け加えられる。

「いいな」

「へっ……」

（『いい』って……!?!）

私に対して彼が『良』と評することなんてないと思っていた。のに、

「そそる」

「……!？」

(な、何を……いや、何が………何でえ………っ!?)

まるで訳が分からない。でも、このままいいようにされていい訳がない。

「だ、だめです……テオドル、様……っ」

初めて、彼に向かって彼の名前を呼んだと思う。家では「テオドル」と呼んでいたから違和感があったけれど、さすがの彼もそんな違和感には気づいていなかった。小馬鹿にした口調で言ってくる。

「キスくらいで子ができると思ってたのか？　さすが、生娘の王女様だな」

「ば、馬鹿にして……ッ！」

「では、子を孕むのに何が必要かは、よく分かっている、と？」

「ひあっ………?!」

震えるような低い声で言う彼に、下腹部をすりすりとは撫でられて声が出た。大きな手で優しく撫でられただけなのに、大袈裟なほど体が跳ねてしまった。ちょうど撫でられた箇所が、じんわりと収縮したからだった。

（なんで……お腹が、きゆうつて………っ）

「そんな欲は微塵もねえみたいな顔しておいて、さっきからいい反応じゃねえか」

「っ……」

「経験はなくとも、興味はありで？　王女様」

「そっ、そんなわけ……っ！」

「うるせえよ。大袈裟な声出すなよ？」

「え……っ？　ひっ、あ……ッ♡」

下腹部を撫でていた手が、今度は私の胸を鷲掴む。すぐにふにふに

♡と遠慮なしに揉まれて、身体中の熱がかあつと頭に集まっていた。心臓がはち切れそうだった。

（おっきい手が、私の胸を揉んで……いやらしい……♡　じゃ、なくて……！）

「てっ、テオドール様……や、め……っ……」

「……なるほど」

「っ……!?　なるほど、って……」

「見かけによらず、そこそこある」

「う、あ♡」

大きさを確かめるようにもにゅもにゅ♡もにゅもにゅ♡揉まれながら評価をされ、恥ずかしいことこの上なかった。

彼は更に「ちようどいい」と感想を言う。さつきから何が「いい」のか。本当に訳が分からない。心臓の音が伝わってやしないだろうか

と不安になるくらい鼓動が激しかった。

(というか、そもそも……!)

「や、約束が……っ!」

「『子作り禁止』なら固く守ってんじゃねえか。子を孕むのに何が必要か、お前もきちんと分かってんだろ?」

「そっ……それは……ッ」

「胸を揉まれるだけで子を孕む体質ならまだしも。……違うか?」  
そう言った彼の人差し指が、すりっ♡と胸の頂点でスライドされる。

「ひあっ♡」

(な、に……今の……っ♡)

薄いネグリジェの上から擦られただけなのに、自分でも驚くほどビクッと体が跳ねて甘い声が漏れ出てしまった。

あられもない自分の声に戸惑っていると、彼は吐息がかかりそうなほど近くで低く言う。

「今……『よかった』な？」

「っ……!!」

今の感覚を「気持ちよかった」と言うんだろうか。分からない。

（体が……勝手に……っ）

「一人で弄ったこともねえクチか」

下世話な事実を推測した彼はフツと笑う。今度こそ耳に吐息がかかって、肩が震えた。

「ますますいいな」

「……!？」

何かは分からないけれど、どうやら好評らしい。これが良くないことであるのは、なんとなく分かった。



（とにかく、早く人を呼ばないと……！）

「や、やめてください……っ！ 誰かつ……！」

「大声出しても別に構わねえが、仮にも興入れした王女が、初日から夫の反感を買うつもりか？」

「！」

痛いところを的確に突かれて、反射的に口を噤んだ。淡々とした声の彼が、痛いところを再度突く。

「その気になれば、お前の国に進軍してやるのはいつでも容易いことだが……」

「っ……！」

「お互い、本意ではねえよな？」

「あッ………♡」

すりっ♡　すりっ♡

さつきと同じように、彼の中指が私の乳首を優しく擦る。

男性らしい指からはかけ離れているような優しい動きで、見てはいけない思いながらもその指を見てしまう。

「んっ……はッ……♡」

「心配しなくても、約束は守ってやる。ただ、せっかく夫婦になったんだしな。……少しくらい、愉しんでもバチは当たらねえだろ？」

「そ、んな……んん……ッ♡」

「優しくする」

「っ♡」

（何、それ……っ♡ 『優しく』 って……あのテオドールが……ッ♡）

すりすり♡ すりすり♡

いつでもどこでも傍若無人だと思っていた彼の発言に分かりやすく

戸惑ってしまうけれど、その間にも乳首を優しく擦られて声が出た。  
出したくないのに、止まってくれない。びくッ♡びくッ♡と体を跳ね  
させながらなんとか声を抑える。

（なんで……優しくすりすり♡されただけで……っ♡ 声が……♡  
自分じゃないみたい……気持ち、いい……ッ♡）

「んッ……♡ あ……っふ……♡♡」

「エッロい声……」

すり……♡ すり……♡

優しい擦り方を保ったまま、今度はゆっくりと擦られる。その合間  
に頬にキスをされた。小さな蝶が飛んできたかのようで、小さく震え  
てしまう。

（キスも優しい……テオドールのくせに……♡）

「あ……ッ、あ♡ んう……♡」

「随分硬くなってきたな。分かるだろ？　ぷっくり腫れて……いやらしいな」

「ッ……………♡」

言われなくても、自分できちんと分かっている。ぴん♡となった乳首の硬さに、彼のすりすり♡が引ッ掛かってしまっているのだ。その引ッ掛かりが乳首を揺らして、快感を更に大きくしている。

（お腹、熱い……………♡）

どうして熱いのか、それは何となく知識としてある。でもそんなことを考える前に、彼の左手が触られていなかった方の乳房に這い寄ってくる。

「こっちもしっかり硬くしてやろうな」

両方の頂点に中指を乗せた彼は、慣れた手つきで再びすりッ♡すりッ♡を始めた。片方だけでも跳ねていた体が、何故か腰を起点に跳

ねてしまう。

「あッ♡ んっ……、だめ♡ 両方はあ……っあ♡」

「両方すりすり♡すんの気持ちいいなあ？ いい声になってきたじゃねえか、処女のくせに」

「ふ……ッ♡ んん……っ……あ♡」

言葉は意地悪なのに、指だけはずっと優しくかった。「優しくする」という宣言通りだ。あの射抜くような瞳の持ち主とは思えないほど。

（ちよっと擦られただけなのに、もう両方とも硬く……♡ つん♡ つていやらしい形して……っ♡）

「こっちはすぐ出てきやがった。さすが王女様、世間知らずでも覚えは早いな」

「や……、ッあ♡」

「もっと気持ちいいのを、教えてやろうな」

「っ!?♡ あんツ……っふ♡♡」

かりっ……♡ かりっ……♡

何の前触れもなく、優しく擦られていたはずの乳首が指の先で引っ搔かれる。口から耐えきれなかった喘ぎが漏れてしまったから、必死に飲み込んだ。

(何これ♡ かりかり♡ってさっきよりも強くされてのに♡ 痛くない♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 声、出ちゃう……♡)

「あ♡ あツ♡ ん……っ……ッあ♡」

「声でええよ」

口を開けたら溢れてしまう嬌声を押し留めるように、自分の手を自分で塞いだ。すると彼は満足そうに言う。

「そうだな、塞いどけ。もっとよくしてやる」

「っ♡♡」

かり♡ かり♡ かり♡ かり♡

さつきよりも少し引つ掻くスピードを速められ、余計に腰がびくびく♡と震えた。こりこりとした乳首の動きがひどく官能的だった。

「ツ~~~~……ふッ……あ♡♡」

「嬉しそうに腰カクつかせてんじゃねえよ。蝶よ花よと育てられた王女様が、そんなはしたない動きしていいのか？」

「どん……ッ~~~~……ふ……、ッ♡」

いい訳がないし、自分でも訳が分からない。彼の指はずっと同じ動きを繰り返していて、「来る」というタイミングが分かるのに、どうして耐えることができないんだろう。

（なんで♡ 反応したくない、のに♡ 声も腰も勝手に動いて我慢できない♡ いやらしいのに♡ 気持ちいい♡ すごい♡ 乳首触られるの、気持ちイイ……っ♡）

理性は働いているのに、どうしたって負けていた。私がどんな反応をしようが気にしない彼が、かり♡かり♡と乳首を虐めてくるたびに、ガラガラと何かが崩れていく。

そうやって崩れた何かを踏みつけるみたいに、彼は静かに言った。

「そのうち、これだけでイけるようになる」

「ッ……?!♡♡」

「そのうち」と言うことは、今日で終わらないと言いたいのだろう  
か。

（イクって……これ以上気持ちいいのが……っ？♡ あ♡ 想像した  
ら♡ お腹がジンジン♡して♡ おしっこ我慢してるみたいに♡ 疼  
いて……っ♡♡）

王の娘として教育を受ける過程で、いわゆる性に関する知識は叩き  
込まれている。「快楽に溺れてはいけない」と、あらゆる教師に口



酸っぱく言われ続けてきたのだ。

(溺れちゃ……だめッ……♡)

「も……や、め……っん♡」

「やめていいのか？」

かりかり♡と硬くなつた乳首を虐めていた指たちが、くる♡くる♡と乳首の周りを回る。

「あッ……♡ あ……っ♡」

くるり♡くるり♡とリズムカルに回るそれを見て、私はぽっかりと口を開けてしまっていた。「物足りない」と思った。

(あ、あ、なんで♡　くるくる♡するくらいなら♡　触って♡　触ってほしいのに、さっきみたい♡　じゃない♡　違う♡　だめ、そんなこと思っちゃだめ♡)

理性と本能がせめぎ合つて忙しい私に向けて、彼が「顔」と言う。

咄嗟に顔を向ければ、唇が近づいてきてまんまと受け入れてしまった。

「んっ♡ んむ……♡」

初めてのキスだった。すぐににゆるり♡と舌が入ってきて鼓動がうるさくなる。他人の舌は、こんなにも暖かくて柔らかいのかと心底驚いた。

（苦しい……っ♡ けど……舌、気持ちいい……♡）

慣れないキスに呼吸が上手くできない。彼にされるがままで、お互いの口からくちゅ♡くちゅ♡と恥ずかしい音が鳴ったから恥ずかしくなった。

けれど、今までの教育が私を大人しくさせた。「夫にキスを求められたら、委ねなければならぬ」と教えられていたのだ。それもこれも、「淑女の嗜み」だと。

（『子作り』は、してないから……っ♡）

言い訳めいていても、そう思った。不本意ながら彼は私の夫であり、私は歴とした淑女で妻だ。であれば、このような場においてはただひたすらに彼に身を委ねるべきなのかもしれないと思った。

彼のぬる♡とした舌は、しばらくの間私の舌を求めた。私だけでなく、彼も息が荒い。はあ♡はあ♡と熱い吐息で、体温が余計に上がってしまふ気がした。

やがて、ちゅ♡という可愛らしい吸い付きとともに、彼の唇が離れていく。

「……リイリア」

「あッ♡」

舌を絡めっている間にもくる♡くる♡と回っていた指が、未だ勃起している乳首をつん♡つん♡と突いた。急な刺激に甘ったるい声で鳴

くと、彼は耳元で笑った。

「どうした？」

「……ッ♡」

意地悪だ。自分の指が、私の体に何をどの程度与えているのか分かってるかのようだった。実際、彼は気づいているのだろう。

（もっと……してほしい……っ♡）

私の卑しい欲望の芽に気づいていながら、こんなことをしてくる。

人差し指の爪で、下からピン♡ピン♡と乳首を弾くなんてことを。

「あっ♡ あ♡ っん♡」

「パンパン♡に腫らしやがって……それでも王女か？」

「ッ、あ♡ それ、だめ……ッ♡」

「だめ？ じゃあ、どうしてほしい？」

「……！」

今度は中指の腹が、とん♡とん♡と乳首の頂点をタップした。まるで急かすようなリズムで、理性が慌ててやってきた。

(だめ♡ だめ♡ 溺れたら、だめ♡ あ♡ でも♡ 乳首されるの、気持ちイイよおっ……♡♡)

とんっ♡とんっ♡と叩かれるたびに、腰が跳ねて奥の方が疼いた。その疼きはどんどん私の脳を侵食していき、いやらしい言葉ばかりを発してくる。

(あ♡ やだ♡ やだ♡ とん♡とん♡じゃ我慢できない♡ さっきの  
カリカリ♡欲しい♡♡ カリカリ♡って、もっと速くしてくれたら♡  
もっと、気持ちよく……っ♡♡)

気づけば、喘ぎのような言葉が漏れていた。

「んっ……あ……♡ もっ……とおっ……♡」

「もっと？」

耳を傾けるように、彼が近づいてくる。ちらりと見えた口の端は楽しげに釣り上がっていた。

「も、つと……ッ♡ して、くださっ……♡」

「それ相応の教育を受けた女の言うことじゃねえな。交渉の仕方は教わらなかったか？ 要望があるのなら、具体的に言うべきだろう？」

「っ……♡」

積み上げてきたプライドを崩壊させたり、刺激させたり、この人は本当に意地悪だ。

（だめ……っ♡）

そんなに人間に、屈してはいけない。

（言っちゃだめ……♡）

卑しい快樂に、溺れてはいけない。

（だめ、なのにいッ……♡♡）

「ッ……………て、ください…………っ♡」

「声が小さい」

「……………っち…………乳首…………♡ を…………っ♡ 触って、くださ…………

あッ♡」

「誰の」

「わ、私の…………っ♡ 私のいやらしい乳首を…………ッ♡ いっぱい、弄ってください、い…………っ♡♡ んっ♡」

とん♡とん♡とされるたびに容易く崩壊したプライドは、もう塵芥に等しい。

「もっと♡」「もっと♡」が限界まで膨らみ、涙目になってしまった私の喘ぎは勝手に懇願へと成り変わっていた。

その懇願に満足げに笑うテオドールは、とんとん♡とタップしていた指を、頂点でピタと止めた。

嫌味のような声が、私の鼓膜をびりびりと襲ってくる。

「弄る……ねえ？」

「ひ、ッあ……♡」

こりっ……♡　こりっ……♡

頂点に添えられた指の腹がゆっくり、丁寧に乳首を左右に倒してくる。

「あっ……ん……ッ………は……♡」

「こうか？」

（足りない……ッ♡♡）

おそろく、これもまた彼はわざとやってる。わざと、ゆっくり、ゆっくり乳首を虐めて私の反応を見ているのだ。くり……♡くり……♡と、まるで手持ち無沙汰のように。つまらなそうに。

「も……もっと……っ♡　んッ……♡」



「ガキみてえなことばっか言ってんじゃねえよ。……まあ、処女なら道理か」

ちゅ♡と何故か耳にキスをされて「ひあ♡」と声が出た。私の処女らしい反応に満足をしたのか、彼が優しく問いかけてくる。

「なあ、処女の王女様。この世間知らずな勃起乳首……どうされたい？」

「っん♡ あ……どう、って……っ♡」

「引っ掻くか？」

「ッ……♡?!」

「引っ掻く」を頭の中で想像すると、お腹がつきん♡と痛くなった。彼の指先が、カリカリ♡と高速で引っ掻いてくる想像が頭にこびりついて離れない。

（さっきみたいにな、カリカリ♡って……さりたい……っ♡）

「もしくは、つねるか」

「ひっ……♡!? あ……ふっ……♡」

くり♡くり♡と乳首を倒されながらも、今度は頭の中で彼の指がきゅ♡と乳首を摘む想像をしてしまった。今より強い快感だろうと思う。目の奥が乾くような感覚に、思わず目を細めた。

「それとも……限界まで引っ張る？」

「う……っ♡ ん♡ はあ……っ……あ♡」

想像するたびに、徐々に高鳴っていく心臓が苦しかった。

きつと、どれも気持ちいいだろう。今こり♡こり♡と虐められているだけで、子宮がぐじゅぐじゅ♡と疼いているのに。

「或いは………」

「っ……♡?!」

彼の頬が私の頬にくっつくと、何故か怖くなって目を瞑ってしまった

た。視覚が消えた瞬間に、彼の香水の香りが鼻腔をくすぐる。すると、子宮がきゅん♡と狭まった。

品のある香りを品のある濃度で纏っているのが、彼の品格だと思った。

だというのに、言葉はいちいちいやらしい。

「舌で、ちろちろと遊ばれるか」

「ひ……………っ♡♡」

彼の舌を想像してしまう。ぬる♡とした内臓色の舌が、まるで蛇みたいになろ♡ちろ♡と私の乳首を舐めていた。そうして、あの瞳にまた射抜かれるのだ。

「ッ……………あ……………♡♡」

「想像だけでどれだけ感じてんだよ、淫乱」

「ち、が……………ッ……………♡」

「んないい反応されたら、期待に応えなくなるじゃねえか」

「え……っ？　わ、ひゃあっ！　待ってっ」

後ろからぎゅうと抱きしめられたと思った瞬間に体重をかけられ、あつという間にベッドに押し倒されてしまった。混乱している私に彼が跨って、金色の瞳で見下ろす。

「テ、テオドル様っ」

「声」

「ッ……！」

少し大きくなった声を叱られ、慌てて口を閉じる。その隙にはだけさせられたネグリジェを脱がされて、小さな悲鳴が飛び出た。

「う、やつ……」

たった一枚の薄い布が無くなったただけなのに異様に恥ずかしくて、自分で体を抱きしめるようにして胸を隠す。すると彼はバカにしたよ

うな顔で私に笑いかけた。

「慎ましい努力だな」

すぐに強引に手首を掴まれ、ベッドに縫い付けられてしまう。顔の横に縫い付けられた手は、男性らしい力に抑えつけられて全く動いてくれなかった。

（裸……見られてる………っ）

裸を男性に晒すことはもちろん初めてで、かあつと顔に熱が集まった。一方で、彼はずっと余裕綽々な表情だ。

「これ以上ないほど乳首勃起というて」

「っ……」

「よく見てろ、リイリア」

「へ……っ」

「今から、お前のいやらしい勃起乳首を舐めてやるからな？」

「くくくッ……!!」

テオドールがべえと大きく舌を出す。私をじっと見ていた。私が彼をじっと見ているのを、彼もまた。

心臓が破裂しそうだ。それでもお構いなしに、彼の舌がゆっくりと頂点へ近づいていく。手首を拘束されて逃げたくても逃げられないのに、あの舌で、こんなにも無防備な乳首を舐められたら一体どんな快感が来るんだろう。

「はあ……ッ♡ はあ……♡」

まだ舌は触れていない。べえと舌を出した彼と目が合っているだけだ。なのに、どうしてか息が上がってしまっていた。

(舌が……もうちよつとで……っ♡)

徐々に近づいてくる舌から目を離せない。それで乳首を舐められたら、ひどく気持ちいいものであることは想像がついた。私の心臓を膨

らませていたのは、卑しい期待なのだろう。

(もう、ちよつとで……………ッ♡♡)

ゆっくり、ゆっくりと彼の舌が近づいてくる。意地の悪い速度に、期待に満ちた声が漏れ出てしまう。

「あ……………ッあ……………♡」

耐えきれない声に、彼の口の端が少しだけ上がった。そうして次の瞬間、

ちろっ……………♡

「ひッ、あんっ♡♡」

舌の先で一度舐められるだけで、簡単に腰が跳ね上がってベッドが揺れた。小動物のような悲鳴に、テオドールは「声」とまた私を叱った。グッと息を飲み込む。苦しいけれど、これくらいしないと嬌声が抑えられそうになかった。

「ん……………」

口を半開きにして私の乳首をちろ……っ♡ちろ……っ♡と舐める彼から、艶かしい声が漏れたから何故かこっちが恥ずかしくなる。

「あ♡ ツ、ん…………あ……………っふ…………んう♡」

（あ♡ あ♡ ちろちろ♡気持ちイイ♡ 舌の先でちろっ♡ちろっ♡って乳首可愛がられてる……っ♡♡）

乳房を見つめていた彼が視線を上げて、かち合った。さつき想像してしまった光景と、全く同じだ。彼の大きな舌が私の乳首をちろちろ♡して、私は金色の瞳に射抜かれて。

「あッ♡♡」

性懲りも無く射抜かれている私を気付けるように、彼はもう片方の乳首をすり♡と擦った。中指で側面をすり♡すり♡と擦られて、我慢できていた声がまた溢れる。



「っん♡　だ、め♡　どっちも、しちや……ッあ♡　ひう♡」

解放された方の手で彼の肩を掴むと、「おい」と叱られながらまたすぐに両手首を一緒に掴まれた。片手でガツチリと捕えられ、頭の上で固定される。まるで捕虜のような情けない格好をさせられて、羞恥心が煽られた。

「いい格好だな？」

一国の王女を娶っておいて、なんと無礼なことだろうか。

そんな憤りが滲むのに、それでも乳首をすりすり♡されながら見下ろされると、自分が「女」であることを体の芯から理解させられてしまう。

さっき「もつとしてほしい」とおねだりする羽目になったのもそのせいだ。彼の指が、舌が、私の品格を少しずつ削っていく。

（だめ……っ♡　やっぱり……逃げなきや……っ♡　まだ、間に合

う……はず……♡♡)

「放、して……っ♡ は……っ♡」

「そうだな。お前が大人しくしてたら考えてやる」  
れろお♡

試すかのような強引さで、乳首を大きく舐め上げられる。彼の中指に弄られている乳首はこり♡こり♡とその硬さをいやらしい仕草で遊ばれていた。

「うっ、や♡ ツ……♡ あ♡ んん……っ♡」

「本当に処女か？ お前。……エロい反応しやがって」

「あ、当たり前……です……っ♡ ふ……っあ♡」

「だとしたら天性じゃねえか、淫乱」

「ッあん♡♡」

ちゅうっ♡ ちゅば♡ ちゅ♡♡

ツン♡と勃っている乳首を可愛い音と共に吸われて、背中が反る。痛い気持ちいいを併せ持った鋭い快感に、声が一際高くなる。

「吸っちゃッ……あ♡だ、めえっ♡」

「淫乱乳首にはご褒美だろ。びんびん♡に勃ってんじゃねえか」

「ひッ♡ う、ッ♡ 淫乱、なんかじゃ………ッあ♡ んっ♡」

「乳首だけで膝くねらせてる処女が、ごちゃごちゃうるせえよ」

ちゅ♡と乳首に吸いつきながら、テオドールは私の膝を触った。自分の意思に反してくねくねと擦り合わせてしまっている膝の皿をささす、と擦られ恥ずかしくなる。

「肝心なところは、すでにしつかりと濡れてるとお見受けするが？」

「ッ………!♡」

どうしたって凶星だった。そこがしつとりと濡れていることを自覚したのは、もう随分前だと思う。何度も乳首を焦らされ、可愛がら

れ、私の下着はお漏らしをしたかのようにびしょ濡れだった。

「触ってやろうか」

「うっ、あ……ッ♡」

大きな手は、太ももを這ってあつという間に私の下着へと辿り着いた。逃げる暇もなく、割れ目をくち♡となぞられる。

「ひやッ、んうっ♡」

「はは、やつぱりぐちよぐちよじゃねえか」

「や……ッ♡ だめ、そこは………っ♡」

「下着の意味ねえな」

「んむ♡」

噛み付くようにキスをされて、口を塞がれた。その合間にもテオドールは私の足に間に入ってきて足を閉じるのを防ぎ、中指はぐちよぐちよになった私の割れ目をこしこし♡こしこし♡と撫でている。

(上から撫でられてる、だけなのにな♡♡)

それだけで、膣内が甘く痺れて腰が浮き上がる。どんどん溢れる愛液に彼の指が濡れて摩擦が起きると、ぬちっ♡ぬちっ♡と恥ずかしい音が聞こえた。

「ハッ、すげー音」

「あっ♡ん、そこ……や、め♡んう……っ♡」

「そこ、じゃなくて『おまんこ』だろ。言ってみろ」

「ッ……お、おまんこ……っ♡やめ、てえ……っ♡ふ、んんッ♡♡」

恥ずかしかったけれど何とか言葉にする。けれど、キスで塞がれた。どうしてわざわざキスをしてくるんだろう。

(もしかして、テオドールも……興奮してる……っ?)

ふとそんな問いが思い浮かんだ。今までの挙動は全て「意地悪」と

思っていたけれど、彼だって「本能」である可能性が、あるんじゃないだろうか。

「んっ♡ あ……っ♡♡?!」

たん♡と割れ目の始まりのあたりを親指で叩かれ、油断した声が漏れた。ビリビリと強い快感が立ち昇り、咄嗟に教本に書かれていたことを思い出す。「クリトリスだ」と思い出すのに、大した時間は掛からなかった。

（私の、敏感なところ……っ♡）

教本に書いていた位置と、文章が合致する。紛れもなく、乳首と同じ『性感帯』だ。腰が勝手に浮いてしまう。

「や、だあ♡」

「まだ何もしてねえだろ」

確かに彼は布越しのクリトリスに親指の腹を置いただけで、何もし

ていない。けれど、ぐっ♡と圧迫はされている。それだけで腰が動くし、腰が動く指が擦れるからまた腰が動いた。「焦れたい」と思ってしまう。

「これだけ腰カクつかせてんのに、舌で舐めてやったらどうなるんだろうな？」

「ッ……………♡!？」

（クリトリスを……………舌で……………っ♡）

「頭の中で想像しろ、リイリア。淫乱なんだから得意だよな？ 妄想」

「い、や……………ッあ♡ あ、ああッ……………♡♡」

ぐう♡♡とクリトリスに置かれた指が、その圧をゆっくりと強めていく。子宮がきゅゅ♡♡と締まっていくのを感じて足を閉じたくなっただけれど、足の間に入っている彼の体で阻まれた。

「乳首を舐められるより、もつとダイレクトに腹にクるだろうな。舌の先で、もちろん♡可愛がられるの想像してみろ。……ほら、もう奥がきゆうきゆう♡締まってきた」

「ふ……ッんう………♡」

全部凶星だ。何で知ってるんだろう。そして、何でその言葉に合わせて腰が浮くんだろう。全部彼の手のひらの上だ。

「あッ♡ んん………つやめ、て………ッ♡」

「いい顔しやがる」

ちゅう♡と唇を押し付けられる。かと思えば、クリトリスを押し潰す親指がぐり♡ぐり♡と動きを変えた。強い刺激に大きな声が出そうになったけれど、彼の口内に吸い込まれていった。

「んんうッ♡ ふ、あ………♡ あ♡」

「たまんねえな………」



「や……っ♡」

驚いている暇もない。彼は意味深なことを呟くと、すぐに私の下着を剥ぎ取っていった。下着のことをこんなにも「頼りない」と思ったのは初めてだ。ベッドの下に放り投げられる様を目で追ってしまっている、彼の中指が直接私の濡れそぼった箇所に触れた。下着越しよりも暖かく、乾燥した手だった。

「だ、め……っ♡ ん♡」

「優しくする」

「ッ……そうじゃな……っんう♡♡」

またキスだ。しかも、本当に優しいキスだった。あむ♡と食べられたかと思ったら、ちゅ♡と遊ぶようなリップ音を貼り付けられる。

その一方で、中指の先はこちゅこちゅ♡とおまんこの入口をくすぐり続けていた。興奮したような息が、私の唇にかかる。

「直接触るぞ」

「えッ……な、あっ♡ あッ♡」

こり♡

彼の中指が、硬くなったクリトリスを押し倒す。電流が流れたような感覚が怖くなり、また大きな声が出てしまった。

「ひッ♡ あんっ♡」

「うるせえよ」

それを、またキスで塞がれる。私の反応を気にしてか、少し彼の指が圧を弱めた。ソフトタッチになった中指が、その形を確かめるようにぬりゅ……ッ♡ぬりゅ……ッ♡とクリトリスを捏ねてくる。

「こっちもパンパン♡じゃねえか」

「っは、んう♡」

「指より舌がいいか？」

その問いが私に投げられたものなのか、彼の独り言かは定かではない。

「ひ、やッ……」

問い直す暇もなく太もを抑えつけられて、彼の手によってカエルのような格好にさせられた。そして当然のような流れで、彼は私のおまんこに向けて顔を埋めてくるのだった。

「だ、めえっ♡」

抵抗虚しくとしか言えない。彼の髪の毛を掴んでみても、彼は止まってくれずそのままクリトリスをちろ♡と舐められた。

「あっ♡ んッ♡」

（あ、これ♡ すごい♡ 気持ちイイのがお腹にびりびりくる♡ こんなの♡ こんな覚えたら、だめなんじゃ……っ♡♡）

「あんだだけ嫌がっというてフル勃起かよ。顔に似合わずやらしい形しや

がつて」

ちろっ……♡ ちろっ……♡

意地悪な言葉を投げかけながらも、彼はひどく優しく突起を舐めてくる。チグハグ感で何に反応していいか分からなくなった。何か言い返してやりたいのに。

（ちろ♡って舐められるたびに腰が勝手に浮いて……恥ずかしい……♡♡でも、クリトリスちろちろ♡されるの♡ いい♡ 気持ちいい♡よおっ……♡♡）

「や、あ♡ん……ッあ♡ テオドール、様……だめ……ッ♡これ、本当にっ……ん♡ん♡」

「吸う」

「えっ」

「吸うから口閉じとけ」

「へ!? いッ、ん♡♡」

ちゅうううううう

命令され、訳もわからないまま口を塞ぐと同時にクリトリスを食べられ、挙げ句の果てに吸い上げられた。

多分、かなり手加減をされている。痛みも過剰な快感もなく、甘い痺れがじんじん♡とクリトリスを襲った。つまりは、「ちようどいい快感」の連続である。

「ッ~~~~:~:~:ん♡ あ♡ ふうつ~~~~:~:~:ッ~~~~:~:~:♡♡」

(待って待って待って本当に♡ これだめ♡ クリトリス吸われるの

♡ だめ♡ 何かが♡ クる♡ キちやう♡ お腹のナカがきゅん

♡ って♡♡)

何かの限界が見えてきそうな快感は、次第に恐怖に変わった。

甘く痺れる快感から逃げたくて強く太ももを閉じると、瞬間的にテ

オドールの腕力に勝ってしまった。彼の頭を挟み込んでしまう形になるな否や「動きづらい」とでも言うように、彼はチツと舌打ちをする。

「おい」

顔を上げたテオドールは、金色の瞳で私を睨みつけた。分厚い手でまた太ももを開脚させられ、ついに体が固まった。なぜか「雄」という言葉が頭に浮かぶ。あまりの圧に、思わず謝ってしまった。

「ご、ごめんなさ……っ」

「軽率な行動だな」

「だって……！」

「だってじゃねえよ。この状態で俺に逆らったらどうなるか、少し考えたら分かることだろうが」

「！」

私を見下ろす彼の目が、晒け出されたクリトリスに向けられた。愛液に塗れ、ぷっくり♡と腫れてたそれは寂しげにポツンとあった。

何も守ってくれない無防備さに、底知れない恐怖がまた滲む。

(このまま、ちゅうちゅう♡っていっぱい……吸われたら……っ♡)

想像しただけで、膣内がきゅうん♡と締まった。ごくり、と息を呑んでしまう。熱っぽい嚙下と同時に、彼が私のお尻をぐいと引き寄せた。

ぶつきらばうな口調で、短く言う。

「お仕置きが必要だな」

「ひ、や……ッ！」

引き寄せるどころか、「持ち上げる」だった。彼の力でも簡単にお尻を持ち上げられてしまい、あつという間に腰まで完全に浮いた。ベッドに接地しているのは肩甲骨あたりだけだった。

足首を掴まれ、ご開帳と言わんばかりにおまんこを見せつけるようなポーズになる。

「つや、だあ……っ！」

「似合うじゃねえか、まんぐり返し」

「……?! こん、なの……!!」

おまんこのすぐ目の前に彼の顔がある形になっていて、お尻の穴まで見られてもおかしくないほど、恥ずかしい格好だ。抵抗したくて体を動かしたけれど、足首を抑えつけられて敵わない。

「お仕置きだつてつってんだろ」

テオドールはズいっと膝の位置を私の体に近づけた。ちようどいい体勢におさまったのか、彼はぶつきらばうな口調のまま続ける。

「イクまで舐め続ける」

ちゅうううううう♡♡



さつきよりも強く吸い上げられて、強い快感に従うように腰がビクついた。けれど彼は逃げることを決して許してくれない。自分の口の位置からおまんこが動かないように、私の足を全力で制御した。

「ん~~~~…ツ♡ 　ん~~~~つ…♡♡ 　んッ♡♡」

口を開けてしまえば甲高い喘ぎ声しか出てこないから、必死に口を結んだ。シーツを掴み、腕に力を入れる。

（「いくまで」……つて……っ♡♡）

言うまでもなく、知識だけはある。快感が最高潮まで達するとやってくる『オーガズム』、或いは『絶頂』のことだ。

男性は、それに伴って射精をする。女性は、稀に潮を吹く。知識としては知っているが、体感するのはもちろん初めてだ。座学では、一つも想像ができずに現実味がなかった。

（でも、もしかして……このお腹のきゅう♡が、一番上まで……♡

いったら……ッ♡♡)

「あ~~~~やらしい匂いしてんな……」

「ひ……うッ……~~~~ん~~~~ッ♡ あッ♡♡ ツ……ん♡♡」

呆れのような興奮のような声色で、彼は口内のクリトリスを舌でころころ♡ころころ♡と転がした。吸われるより頻回にくる尖った快感で腰がビクビクッ♡と震えては、彼の手で押さえ込まれた。

(クリトリスころころ♡ ずるい♡ 声が♡ 口開けられない♡ 苦

しい♡ 苦しいのに気持ちイイ♡ 『あと少し』なの♡ わかる♡)

『あと少し』で、絶頂がくる。経験はなくとも、自分の体の感覚くらいは分かった。私がいのように腰をビクつかせているのが面白かったのか、テオドールの目は少し笑っているように見えた。

だんだんと上がっていく腰のせいで、私の体はほとんど折りたたまれている。そんな恥ずかしさしかない格好をさせられたまま、今度は

乳首をくりくり♡と弄られる。

「あ♡♡　んう~~~~♡♡」

中指でこり♡こり♡と乳首を弄られると、さつきまで『あと少し』だった快感が形を変えた。これ以上絞られないくらい収縮した膣内が『もうクる』と言ってるかのようにだった。

クリトリスの裏側を、テオドールの舌の先がちゅこちゅこちゅこちゅくと素早く扱いてく。

（あ、クる♡　クる♡　何かクる♡　お腹が、きゅうううう♡って最後まで絞られて……っ♡　『イク』が♡♡　キちゃうう……っ♡♡）

経験したことのない浮遊感に襲われて怖くなるけれど、誰も助けてくれない。

（このまま、彼にクリトリスを舌でちゅこちゅこ♡ぢゅうぢゅう♡さ

れて、私が泣いても、呻いても、限界に達するまで、ずっと、可愛がられて……っ♡♡)

そうやって『イク』を待っただけの私に、彼が目が合わせてきた。  
黄金色。

(あ)

瞬間、ばつん、と脳の配線が一つちぎれるような感覚に襲われた。  
そのあとはもう、急転直下である。

「んっっ……♡♡ あっ♡♡ んっ♡♡ ん♡♡ んう……っ  
ん……っ……っ♡♡」

落ちるような上がるような浮遊感が頂点に達すると、私の腰はビクビクビク♡と大きく揺れた。膣がぎゅう♡と絞られたまま、なかなか戻ってくれない。

(何、これえ……っ♡♡ すぐ、いい……っ♡♡ イクの、気持ちイ

イ……ッ♡♡♡

頭がふわふわして、お腹がじんじん♡と痙攣で震えている。

「んっ……♡ はあ……ッ♡」

表情を律することができず、蕩けた顔で必死に呼吸をした。下半身が、彼の腕から解放されてベッドに落ちる。それでも「気持ちいい」の波が収まらなかった。

（腰が……ピクピク♡って……♡ 止まんない……っ♡）

初めてのオーガズムに戸惑っていると、テオドールがゴソゴソと動いているのに気がついた。私に向かつて、低い声でぼやいてくる。

「あ………最悪だな………」

また悪態をつかれたと目を向け、そのまま固まってしまう。

（お、おっきい……！ っていうか、なんで……!!）

彼の手に、大きく反り立った怒張が握られていたのである。

初めて見た見た陰茎は、思ったよりもグロテスクだった。でも、それよりも驚いたのが大きさである。

およそ人体に入れるようなものではない。未知の生物のようだった。

「足」

「え……ひや……ッ！」

太い棒状のモノを勃起している彼は、ぐったりとしている私の太ももをまた抑えつけ、無理やり開かせた。

もちろん恐怖しかない。

（挿れられるわけには……っ！）

しっかりと自身の役割を思い出し、身構える。けれど、私の恐怖はすぐに消沈した。

「そのまま」

私をはしたない格好にさせた彼は、私の濡れ切ったおまんこを前に怒張を掴む手を上下に動かし始めたのだった。

これも知識としてある。男性の『自慰行為』だ。

「っ……?!」

混乱で目が奪われる。挿れられてしまうという予想が裏切られ、予想だにしない自慰が始まったのである。混乱するなという方が無理な話だろう。

（これが……え、いや……なんで………っ!?!）

固まってしまった私を見下ろし、ごしごし♡と自身のモノを抜くテオドールと目が合ってしまう。

「ッ……」

一度合うと、逸らせなくなつた。射抜かれるのだから当たり前だ。その鋭さのまま、彼がじつとりと目を細める。

「クソが……………」

何故かそう悪態をついた彼は、怒張を抜くスピードを速めると私に覆い被さつてキスをした。

くちゅ♡くちゅ♡と頭の中で舌の絡む音が響き、はあはあと獣のよ  
うな吐息が唇にかかる。その下で、テオドールの手は一心不乱に自分  
の怒張を抜いていた。

(激しい…………♡)

興奮している舌に翻弄されていると、やがて彼は小さく呻いた。

「ッ……………」

すぐに、お腹の上に温かいものが掛けられたことに気づく。びゅ  
る♡びゅるる♡と出されたのは、恐らく精子だろう。自慰の音は  
消え、彼の荒い息だけが残された。その息のまま、彼は私の唇を再び  
求める。



「はあ……っはあ………」

「んっ……は、あッ……♡」

（「男性は射精をした後は態度が冷たくなる」……って、婆やが言つてたけど……）

座学と実践は違うものだ。知らないことばかりである。彼に「世間知らず」と言われたが、それもやや否定はできない。

（……気持ちよかった）

ぬるぬる♡と私の舌を堪能する彼に、私は小さく喘いだ。未だじくじくした秘部に、頭がぼうつとして抵抗が叶わなかった。



(つていうか、このまま一夜を明かすの……!?)

なんだかんだとベッドの上で彼に抱きしめられている。余韻、というよりは抱き枕的な用途だった。

「えっと……あの、テオドール様……? このまま寝てしまうのは、あまり良くないのでは……」

誰かに見つかつたら面倒なことになるのではないだろうか。そう思つて聞くと、彼は私の問いとは別の軸で話を始めた。

「その呼び方やめろ、仰々しい。敬語も嫌々使つてゐるって顔してるくせに」

「……」

そんなに分かりやすかつただろうか。でも、私はいわば『人質』だ。この結婚に、国の命運がかかっていると云つても過言ではない。

だから嫌でも敬語くらいは、と思っていたのだ。

けれど、彼にとっては不快だったらしい。あつけらかんと言う。

「二人きりの時は、『テオ』でいい。敬語も使うな」

「ふ、二人きりって……」

「第三者がいる前で変に親しげにすると、妙な勘繰りをされる。めんどくせえだろ」

「じゃなくて、その、そもそもこれは政略結婚で……!」

親しくするつもりもなかったから、二人きりになるつもりもない。

そう思っていたのは私だけなのだろうか。私の言葉を、彼はフツと鼻で笑った。

「だから？」

「だから、二人きりなんて場には……っ」

「自分は政略の駒にすぎないという自認は勝手だが、であれば尚更、

『敵国の王子の友好的態度』を無碍にするべきではないと思うが？」

そう言われてハツとする。確かにその通りかもしれない。波風を立てないことが私の使命なら、感情的に否定するべきではない。

(いや、でも……これは、どうなの……?!)

だからと言ってこの「性行為未満」を許容するような対応をしていいものだろうか。

有無を言わせない論調に気圧されていると、テオドールは冷たく言った。

「存在して、呼吸をするだけ。それが、お前の駒としての役割か？」

「なッ……!」

皮肉でしかない言葉だ。言葉が詰まる。「そうであるなら、まるで使えない」と馬鹿にされているようだった。

(だって、それが……私の………)

幼い頃からの使命だと信じ切っていた。けれど、彼の言葉に何故だか簡単に揺さぶられてしまう。

（それ『だけ』？ 本当に？）

とても簡単な命題に思えたけれど、何も捕まえない。逃げるような思考に、彼はさらに油を注いでくる。

「世間知らずでいたいと言うなら、止めはしねえけどな」

「……！」

配慮も何もない物言いに、頭がカツとする。

（そんな言い方しなくても……！！ 本当に、この男は……ッ！）

「……で、お前は、『リリイ』か？」

「えっ？」

話題が急に変わったから、間拔けな声を出してしまった。同時に「なんで知ってるの？」と思う。『リリイ』は家族だけが呼ぶ、私の

愛称だった。

「愛称」

その声には「自分は『テオ』と開示したが？」という圧がある。でも、勝手に開示してきたわけだし、『リリイ』なんて本当に親しい人しか呼んでいない。決して、彼からそのような呼ばれたいわけではなかった。

（でも「リリイって呼ばないでください」って言うのも波風が……）  
やっぱりどうしたらいいか分からず、黙りこんでしまう。すると、彼はそれが「答え」だと判断したらしい。

「リリイだな」

「ツ……よ、呼ばないでください！」

（あ、しまった……！）

どうしたらいいか分からないと思っておきながら、考えるより先に

言葉が出てしまった。昔からこういうところがある。彼と初めて会った時だってそうだ。頭がかあつと熱くなつて、皮肉を返さずにはいられなかったのだ。

「呼ばないで……『ください』？」

私の言葉尻をがっしり捕まえて笑う彼に、余計苛立ちが募る。

（この男は……本当に……っ!!）

「………ツ貴方は、リリイって、呼ばないで！」

「ふは」

勢いに任せてそう言つてやると、口を開けて笑われた。少年みたいな笑顔に、心臓が一瞬だけ痛くなる。なんで。怒りのあまり、血管でも切れたのだろうか。

「これは大変失礼しました、リイリア嬢。どうぞお許しを」

「ば、馬鹿にして……ッ！」

何かを言い返してやろうと思ったら、くつくつと喉を鳴らしながらテオは目を瞑った。嘘でしょ、そのまま寝る気？と驚いていたら、本当に寝てしまったのでとても焦る。

（信じられない……刺される可能性とか考えないのかしら……）  
もちろんそんな予定はないけれど、嫁いでいるとはいえ私は他国の人間なのに。

不思議に思つて、しばらく彼の寝顔を見つめてしまった。黙っていれば見惚れるほど端正な顔だ。悔しいし、羨ましかった。



## 第二章

フォーリッツ国に嫁いで一番「良かった」と思うのは、ご飯が美味しいところである。五つの国との国境があり、且つそれらを侵略しつつあるからか、朝昼晩と多種多様な食事を提供された。

晩餐会などがない限り、私は自室で食事をいただいている。どうやらフォーリッツの王族は、家族で食事をする場をほとんど設けていないらしい。

（今日も美味しそう……）

ティニアースから引き連れた従者が毒見をしている間、私は吞気にもそんなことしか考えられない。それくらい、見目も美しく芳しい料理ばかりだった。

「……はい。お食事、特に問題はありません。どうぞゆつくり召し上がってください、リイリア様」

「ありがとう」

今日は、起床してすぐ空腹を感じていた。従者が出て行き、一人になった自室で私は意気揚々とフォークを掴む。「やつと食べられる」と顔が綻んだ次の瞬間であつた。

どんだんどんだん！

「~~~~~ツ……！」

テオの自室に繋がっているドアが力強く叩かれ、反射的に目を細める。

（また……！）

ため息をつきそうなところに声を掛けてきたのは、乱暴なノックを繰り返す張本人、テオである。

「おい。起きてんだろ、リイリア。朝飯持ってこっちに来い」

「……」

なんだかんだと、こうやって呼び出されることが多い。これも彼女の「友好的」態度だとすると、やっぱり逆らうわけにはいかなかった。

（ベルがあるんだから、鳴らせばいいのに……いや、鳴らされたくないけど……）

食事を載せたトレイを運び、ドアへと向かう。

すると、タイミングよくドアを開けてきたテオが上から不満をぶつけてくるのだった。

「遅え」

「……おはようございます」

両手が塞がっているので、ドアを開けてもらったまま彼の部屋に

入った。瞬時に、彼の香水の匂いに気づいてしまう。もうこの香りにも慣れたものだった。

彼の食事が置かれたテーブルの真正面に、自分のトレイを置く。並べられた食事を見比べて、彼が言う。

「絶対足りねえだろ」

「前も言っただけ、十分足りません。貴方が大喰らいなだけよ」

「薄っぺらいはずだ」

「……」

この場に私の従者がいたら「何で体の薄さを知ってるんだよ」とツツコミを入れるところだろう。でもそんなツツコミができる人はこの場に誰もいない。何も気にしないテオは、特に何を言及するわけでもなく食事を始めた。

（マイペースすぎる……）

このペースにいつでも振り回されている自覚がある。そこそこ言い返せるようにはなってきたけれど、諦めるタイミングも分かってきたという感じだ。

「何か話しろ。面白いやつ」

「ええ……」

公務以外の時間、彼はよほど退屈しているらしい。こういう無茶振りをよくされる。言い返したところで喧嘩になるだけなので、私は諦めて話題を探すしかなかった。

「えーつと……じゃあ、」

面白い話と言っても、腹を抱えて笑えるようなエピソードを披露する技量など私にはなかった。だから、雑学のようなものを披露するのが常である。

今日は、ティニアースにのみ生息する動物のことを掻い摘んで話を

した。

で、これが変に盛り上がってしまったのだった。とても、悔しいことに。

「山羊に近い生態ということは……そいつは草食か？ 平地に生息するなら、農地への影響はないのか？」

「……ええ。その通り、獣害が喫緊の課題になってるわ。だからお父様……現王の代から、国が対策に力を入れることになったの。予算もしっかり組んで、組織も作って」

「具体的には？」

「そもそもこれは、農地拡大に伴う獣害でもあって……」

相応の教育も受け、様々な国へ出征する彼の知識は凄まじかった。

正直、楽しく会話ができてしまっている。

それだけではない。

（あ、これ美味しい……）

朝食に用意されていたフルーツに、私が一瞬だけ顔を綻ばせると彼はふっと笑った。目敏さに恥ずかしくなり、すぐに顔を引き締める。

私はそんな風に可愛くない反応するのに、彼は笑った。雑談の続きであるかのように、さらつと言う。

「ティニアースのオレンジを仕入れさせた」

（んぐう）

馴染みの味なら美味しいし、顔も勝手に綻ぶに決まっている。

というか、おかしい。だってこれってなんだか。

（なんか……『愛されて』いる……!?!）

テオとの時間は、そんな挙動が大半だった。

私よりかなり早い段階で食事を終えているテオは、食後の紅茶を飲みながら「昔から、そういうのばかり食ってるイメージだな」など

と言う。

初対面からこれまで、社交の場で何度も顔を合わせたことがあるが、私は彼が何を好んで食べていたかとかは全く覚えていない。

なのに、彼はきちんと覚えていて、あまつさえわざわざ用意だつてしてくれるのだ。

「……ありがとう」

まんざらでもない自分がいた。お礼を言いながら、照れて微笑んでしまうくらいには。

「幸せな結婚生活」という言葉がチラついた。食事を共にし、意見を交わし、時に笑い合う。恋愛小説のような結婚生活が、板につき始めてしまっている。

こんな結婚生活、一切想像していなかったのに。

「……」



かと思えば、彼の目の色は急に変わった。

「っ……………」

私はその度に、地雷を踏み抜いてしまったような気持ちになる。見えてしまうのだ。彼の瞳が、ぐらつと熱くなる一瞬を。

「リイリア」

私は、その瞳にどうしても射抜かれる。目を逸せなくなつて、動けなくなる。彼が許可をくれないと、動けない。そんな気持ちになる。

「膝の上に」

だってこの一連の流れはまるで、私の笑みに欲情してるかのようにじゃないか。

ドクンと心臓と子宮が跳ねた。もう、テオの言葉の真意を心から理解していた。じくじく心と悲しむ膣を引っ提げて、密かに唾を飲み込みながら彼に近づく。

彼の座るソファーに向かつて、膝を埋める。向かい合う格好で、がっしりとした彼の肩を掴んだ。すると、私の胸元を眼前にしたテオは静かに胸元の生地をずらして、私のおっぱいを曝け出してしまう。つん♡と主張した乳首が、テオの顔のすぐ近くで揺れた。

「あ……っ」

「ハッ……何故もう勃っている？」

揶揄うように言われて顔が熱くなる。

そんなの、いつも「隠れて性的なことしている」からだ。この後、「何をされるか」が分かっているからだ。乳首を虐められる快感は、いつでも容易く私の理性を崩壊させた。

アフタヌーンティーの後、公務の最中、寝る間際。

昼夜問わずチリンチリンとベルで呼びつけられるたびに、虐められている。乳首を引っ掻かれたり、クリトリスを捏ねられたり。私は誰

にも聞かれないように喘ぎ声を小さく落とし、時には乳首だけで果ててしまうザマだった。

そういう密やかで淫猥な日々、私の体はもう十分に屈してしまっている。

「まだどこも触ってねえのに」

「んっ……♡」

ふうつと乳首の先っぽに息を吹きかけられて、ビクツと肩が震えた。ぷっくり♡と腫れ、今か今かと待ってしまっている乳首には過分なほどの刺激だった。

「こんな気持ちのいい朝だったのに、随分はしたない声だな？」

はしたない体にしたのは、他でもない彼だ。その自覚があるのか、楽しい物言いだった。

テオの大きな手が、ふに♡ふに♡と優しく乳房を揉みしだく。けれ

ど、不自然なほど乳首に触れてくれなかった。

（心臓が……痛い……）

それでも、彼の指は必ずこの腫れ上がった先っぽにやってくる。

何度もされたことだから、もう分かりきっていた。重たい期待で、心臓がドクン、ドクン、と大きな鐘を打つように鳴っている。

「なに期待してんだよ」

もにゅもにゅ♡と乳房を揉み続ける彼の手を見下ろしてしまっているからか、その視線を見たテオが揶揄ってくる。

いつもの長い指は、私のつん♡と尖った乳首のすぐそばにあった。

無骨で太い指と、いやらしく勃起した乳首から目を離せない。

「そんな、こと……っ♡」

「へえ？」

ニヤリと笑われて、また顔が熱くなった。自分でも「嘘に近い」と

いう自覚があつたからだ。その羞恥心すら、彼にバレているようだった。

「こーんなに腫らしておいて？」

くる♡　くる♡

爪の先をしならせるようにして、乳輪のさらに外側をテオの人差し指が回った。皮膚をなぞられるだけのくすぐったい感覚なのに、鳥肌が立って「ん♡」と甘い声が漏れてしまう。

あと数センチ、円を小さくしてくれたら気持ちがいいところに届くのに。

「これ、は……ッ♡　っ♡」

「期待してねえっつーなら、下品なほど勃たせてんじゃねえよ」

「っ……♡」

「ピンピン♡に勃起しやがって」

嫌味を言いながらも、彼はくる……っ♡くる……っ♡をやめてくれない。わざとらしく乳首を触ってくれない指を、目がじいっと追いかけてしまう。

(乳輪……もうちょつとで届くの……っ♡ 意地悪されてる……♡♡)

「は……あッ……♡ あ……♡」

「顔も淫乱そのものだ。今度手鏡でもプレゼントしてやろうか、リイリア」

「ん……ッ♡」

「まだ触られてねえのに発情してる顔……自分でも見てみたいだろう？」

(意地悪、意地悪、意地悪！)

羞恥心を煽る言い方に腹が立ち、思わず睨みつけた。目が合って、

笑われる。

「んな怖え顔すんなよ」

またもや馬鹿にしたような口調で言われ、少し大きな声を出してしまふ。

「本当に貴方は……ッ！」

「はいはい悪かった。ここだろ？ 王女様」

「あ♡」

ニヤニヤ笑いながら私をいなした彼の人差し指が、ついに両方の乳輪の上を回り始める。ピンク色の柔らかい部分をくるっ♡くるっ♡と回られると、その甘さに声が漏れた。

「んっ……、は♡ あ♡」

「乳輪くるくる♡されんの、気持ちいいな？」

（さっきよりは気持ちいい……けど……っ♡）

それ以上に、物足りなさがあつた。

くるっ♡くるっ♡と描く円の大きさを、もっと小さくしてほしい。  
真ん中にある突起を触ってほしい。もうびんびん♡に勃起して、痛み  
さえあるのだから。

「はあ……ッ♡ あ……♡」

「大丈夫か？ 随分と息が荒いようだが」

「……ッ♡」

無意識に息が上がってしまっていて、慌てて呼吸を細くした。

口も半開きになっていたし、よっぽど物欲しそうな顔をしていたの  
だろう。テオが穏やかに問いかける。

「何が欲しい？」

「ん……ッ♡ は……ッ、あ♡」

くるくる♡と乳輪をなぞる彼に、顔をじいっと見つめられる。彼の



指はとても器用で、一回たりとも私の突起に触れてはくれなかった。

腫れた乳首がますます痛くなり、ジンジン♡と熱を持っていた。彼に舐けられた乳首は、彼の指が掠めてくるのを待ち望んでいるのだ。

「素直じゃねえ女だな。お前が懇願すれば行くまでカリカリ♡してやるつてのに」

「っあ……ん♡」

「想像だけで腰へコつかせてんじゃねえよ」

「ちが……っ、う……♡」

「まだ一番いいところ擦られてねえのに、擦ったらどうなるんだ？  
なあ」

「ッ♡ あ……♡」

「擦らりたいか？ リイリア」

「ひうッ……♡」

一段と低くなった声に、何故か腰が反応してしまう。真正面にいる彼の怒張は、私の乳首よりももうずっと硬かった。

「リイリア」

追い討ちをかけるように私の名前を呼ぶ彼の指が、乳輪をカリカリ♡と引っ掻き始める。

（乳輪、だけ……っ♡）

周りの皮膚よりフニフニと柔いそこに彼の指が沈み、ジンジン♡と痛む突起を焦らすような快感を運んでくる。

「あ♡ん……ッ……っは♡」

「こうやってカリカリ♡されるの、好きだろ？」

（そこじゃない♡ そこじゃないのに♡ もうちょつとなのに♡ 焦れたいっ……♡）

「そこじゃない」なんてことを思ってしまったている自分が情けない。

情けないけれど、自戒する余裕もないし我慢だつてできない。

とにかく、腫れ上がって痛みを持つ乳首を慰めたい。そんな気持ちばかりだった。

「そこ……ちが……っ♡ ん……っ♡」

「違う？　じゃあどこだ？」

今度は、乳首からまた離れた乳房を指先で引っ搔かれた。くすぐったいだけの動作に、燻っていた怒りが再びやってきて泣きそうな声を絞り出す。

「テオっ……♡　ち、違っ……うう……っ♡」

「ハッ……」

情けない私の声を鼻で笑った彼は、私の腰をぐいと抱き寄せた。そうして、キスをする。乳房を手に収めて、ふにふに♡と柔らかさを遊びながら、揶揄うように言われる。

「じゃあ、お前が案内しろよ」

彼の肩を掴んでいた手を掴まれ、肩から引き剥がされた。宙ぶらりんにされた手を掴まれる。「案内しろよ」とは、「自分でイイところに置け」ということだろう。

「っ……っ♡」

パンパン♡になって痛い乳首に我慢ができない私は、その手をきゅっと握ってしまう。温かい手のひらに、何故か一瞬だけ安堵した。彼だって一人の人間だ、というしつかりした体温だった。

（大きい……………）

身内以外の男性の手を取るなんて、ほとんどない人生だ。思ってたよりも大きくて、思っていたよりも重たい手に驚いた。

これに掴まれてしまったら、私は逃げられないだろう。そんなことを思ってしまう。

テオの手は、非力な私の手に誘われてくれた。近い距離でじつとりとした視線を向けられながら、人差し指が乳首に触れるように彼の手を近づける。乾燥した指の腹が狙い通りに乳頭を掠めてくれると、

「ん……ッ♡」と我慢できない声が漏れ出た。

「で？　俺はどの指でお前の乳首をカリカリ♡してやったらいいんだ？」

「~~~~ッ……！」

そうやって案内したのに、テオの指は乳首にぴと♡と触れたまま動いてくれなかった。私の胸に手のひらを置いたまま、わざとらしく首を傾げてくるから半分やけになって返してしまおう。

「ひ、人差し指……っ！」

苛立ったようなおねだりの何が面白いのか、テオは笑った。体を近づけ、私の唇にちゅ♡とキスをする。予想以上に甘く響いたリップ音

で、肩がびくんつと跳ね上がる。

「仰せのままに、リイリア嬢」

かりっ……♡

「ッ、あ♡」

勿体ぶった仕草でゆっくり爪を立てられただけで、望んでいた快感に腰が大袈裟なほど跳ねた。

（しゅごい♡ 焦らされた乳首されるの、気持ちいいっ……♡ もつと……♡ もつとカリカリ♡ カリカリ♡ほしい♡♡）

一瞬ではしたない欲が膨れ上がり、彼の首にしがみついて体を近づけた。目の前のテオは私の乳首を見下ろし、徐々にかりッ♡かりッ♡と引っ搔くスピードを速めていく。

「あっ♡ あ♡ んッ……あっ♡」

「下品な声出しやがって……どっから出してんだよ、従者たちと喋る

時とは大違いだな」

「あ、だって……ッ♡　ずっと……んっ♡　焦らされ、てっ♡　あ♡」

「お前がさっさと甘えてりやこんなに時間かかってねえんだよ、ド淫乱」

「あッ、あ♡」

「焦らされた方が気持ちいいってことか？　テメエのオナニーに旦那の指使ってじゃねえ」

「ひッ♡　あっ♡♡」

カリカリカリカリ♡♡

叱りつけるような声で責めながら、テオの指がどんどん速くなる。

爪で引っ搔かれるたびに硬くなった乳首がぷるッ♡ぷるッ♡と揺れて、恥ずかしいのに目が離せなかった。

「あっ♡ あ、だめ♡ テオっ、あッ♡ んッ、だめ、あっ♡♡」

「何がだよ、これが欲しかったんだろ？」

「だめっ♡ だ、め、んッ♡ イっちやう♡ からあっ♡ あ♡ カ  
リカリ♡ 速いの、すぐっ♡ イっちやうっ……からっ♡ おッ♡ あ  
♡」

「逃げんな。このまま我慢しろ」

「っ♡♡」

体を反らして逃げてしまう私を、間近にある目がきつちりと射抜いてくる。大きな手のひらから伸びた、長い人差し指が乳首をカリカリ♡ カリカリ♡ と虐めていた。同じ動きを繰り返すおもちやみたいに、私の勃起乳首を執拗に引っ搔いてくる。

「乳首でいくとこ、見てやるよ」

「やっ♡ あッ♡ んっ、あっ♡」



「ほら、焦らされまくってパンパン♡に晴れた乳首、高速カリカリ♡されんの気持ちいいなあ？」

「やだ♡ だめ♡ あッ♡ ふっ、ん♡ あッ、あっ♡」

「っっーか何で逃げられると思ってんだよ、ここまできて」

「ッ、んっ……♡」

そうだ。私は逃げられない。今この場からも、この結婚からも。この国に來た時点で、私は。

（彼から……逃げられない……♡）

カリカリッ♡カリカリッ♡とひたすらに乳首を虐められる。刺激に反応して腰が勝手に動く、割れ目の下にある怒張が快感を増幅させた。棒状のものにちょうどクリトリスが当たるのが気持ちよくて、途中から自分で擦りつけてしまっていた。

「んッ♡ あっ♡ あ……ッ♡」

「さっきから勝手に人のちんぽ使ってんじゃねえよ。ヘコヘコ♡しやがって」

「ッ♡　だ、つてえ……っん、あ♡」

「旦那に乳首カリカリ♡虐められながらちんぽで擦るのがそんなに気持ちいいのか？　リイリア嬢は処女のくせに随分とオナニーがお上手なことぞ」

「いつ、じわる……♡　んッ♡　は……っあ♡　んっ♡」

「ヘコヘコ♡すんの止めてから文句言えよ。どんどん速くなってるじゃねえか」

カリカリ♡と乳首を刺激され続け、腰を振ってクリトリスを押し付けているせいで絶頂がもうすぐそこまで来ていた。口を開けたまま、思わずテオの名前を呼んでしまう。

「あッ♡　あッ♡　テオ♡　テオっ♡　私、もう……んッ、あ♡」

「あーもうイっちゃうなあ？ エッロい顔して……こつち見ろ、リイリア。このまま乳首でイきてえだろ？」

暗に「顔を向けなかったら止める」と言われ、キツと目を向ける。

「っ♡ いじ、わる……♡ ほんとに……ッ♡ あ♡ あッ♡」

「ハッ……これで終わりにして欲しかったらイク時ちゃーんと言えよ？ 乳首気持ちいいです、乳首カリカリ♡大好きです、意地張ってごめんなさいって」

「も、お……ッ♡ ツ、お♡ あッ♡ あ♡♡」

カリカリカリカリ♡♡

少しもブレずに高速で乳首を引っ搔かれ、テオの瞳を見つめながら喘いだ。テオの反り立ったおちんぽにずッ♡ずッ♡とクリトリスを押し付け、もう少しで届く頂点に向けて目を見開く。

（くる♡ くる♡ もうすぐ♡ おっきいやっ♡ もうちよつと♡

テオ♡ テオ♡♡)

「ほら、リイリア。もうイけるな？　我慢すんなよ？　こっち見ろ。

顔見せろ」

頂点を待ち侘びて彼の指を見てしまっていたのを、改めて指摘される。再び瞳を見据えようと、彼もまた私をジッと見ていた。

薄ら笑いを浮かべた、いつもの余裕綽々な表情だ。かと思えばニツと口の端が上がる。まるで、「もうちょつとだな」と言うような。

(あ♡　なんで、目が合っただけで……っ♡♡)

「ッあ、あ♡　イく♡　イきます♡　乳首カリカリ♡でっ、ん♡　イ

きます♡　ごめんなしゃ……ッあ♡　あッ♡　カリカリ♡しゅき♡

しゅきれすっ♡♡　意地張って♡　ごめんしゃいっ♡　んッ♡　あ

♡　テオ♡♡　テオ♡♡　あ♡　あっ、あッ♡♡　だめ♡　イ、く

♡♡　ッ………イくイくイく………ッあ♡♡　………ッッッ

♡♡♡」

ビクビクビクッ♡

クリトリスをおちんぽに押し付けるようにして腰を反ると、溜まりに溜まった快感が弾けて大きく震えた。

「はあ……ッ♡ あ……♡」

絶頂の余韻でピクンッ♡ピクンッ♡と小さく震える私の腰を、テオが黙って引き寄せる。息を荒くした私を宥めるように、ちゅ♡ちゅ♡とキスが貼り付けられてその唇をぼんやりと見てしまう。

「ん………っ♡」

私の濡れた割れ目の下にある怒張が、ずっ♡ずっ♡と緩やかに動いていた。硬く膨張したモノは彼の興奮を物語っているのだらうけど、私は知らんぷりをしてしまっている。しっかりある後ろめたさは、罪悪感の形をしていた。

(何を、考えてるんだろう……)

黙って私にキスをしながら、戯れのように腰を動かす彼にそんなことを思ってしまう。

当たり前だけれど、まだまだ知らないことばかりだ。

言動に反して食事の所作は恐ろしく美しいことだとか、朝日に照らされる瞳がトパーズのように輝くことだとか、本棚の蔵書が専門書から小説まで多種多様なことだとか。

私は、彼のことをよく知ろうとしなかったのだな、と思い知らされることばかりだった。



そんな日々が続いたある日のこと。「暇だ」と呼びつけられて少し喋った後、彼はしれっと公務に取り掛かり始めた。

もちろん私をアフタヌーンティーセットの前に置いて、である。

（「暇だ」とは……）

などと思いつつ、用意されていた紅茶とスイーツを無駄にすることもできないから、一人静かに咀嚼をする。

彼の部屋の窓は二箇所開けられて、風の通り道ができていた。目を瞑りたくなるほど穏やかで気持ちのいい風が吹いて、気を抜いたら笑みが溢れてしまいそうだ。

燦々とした光が、絨毯を照らす。埃すらキラキラと輝いている。強い光は、時に残酷なほど「見たくないもの」を晒してしまうと思った。

(私みたい)

彼の瞳の前で凍ってしまふ自分を思い、少しばかり自己嫌悪した。

随分絆されているような気がするけど、果たして私は国のために、自分の役割をこなせているのだろうか。

ビリッ　　ビリッ

「っ？」

底が見えない問いに潜りかけていると、何かを破り捨てる音で引き戻された。彼のテーブルの上に散った上質な封筒には、ロカイア国の封蝋がされている。ロカイア国といえば、近年フォーリッツ国と懇意にしている大国だ。思わず声を掛けてしまふ。

「それ……ロカイア国の封書じゃ……？」

「大した内容じゃない」

「でも、返信くらいは……」



いくら懇意にしても、礼儀を欠いてしまえばその翌週には戦が始まる、なんてこともザラにあるのが国交だ。それでも彼は、静かな声でこう答えた。

「側室の話に反応なんかしたら、向こうの思う壺だろ」

「……」

何もおかしい話ではない。なんなら誰もが彼の子種を望むだろう。この国の政治に潜り込める絶好の機会だ。私が子を産まないのなら、尚更。

彼にとっても当然の権利なのだ。いつかそんな日が、必ずやって来るのだろうとさえ思う。

（……ムカムカする）

昨日今日と食べたものを思い返したけれど、心当たりになるようなものはなかった。

だからこそ頭の中でカアッと熱くなつたものが喉に詰まつて、嫌な言葉が飛び出ていく。自分の悪い癖だと分かっているのに、制御が効かなかった。

「その時はどうぞ、捨ててください」  
私を。

何故か敬語で出てきたその言葉の意味に彼もびっくりしていたけれど、自分でもびっくりした。

どうしてそんな言葉が出てくるのか。

自分の不可解さに目を丸くしていると、テオに見つめられていることに気がついた。もちろん、射抜かれる。

（あ、逃げなきゃ）

何故かは分からないけれど、そう思った。だから慌てて目を逸らし、床に縫い付けられそうになった足を動かす。

「ごめんなさい、部屋に」と帰ることを仄めかして立ち上がり、彼に背を向けた。そのまま、逃げるように寝室のドアに向かって歩き出す。

「ひあっ」

でもあっという間に後ろから抱きしめられて阻まれてしまった。驚く暇もなく、彼の手が私の服の中に入ってくる。

「勝手に嫉妬して、勝手に逃げてんじゃねえよ」

胸元からやってきた彼の右手は、私の乳房をもにゅ♡と掴むと今度はすぐにきゅ♡と乳首を摘んだ。瞬時に、甘い声が漏れてしまう。

「ッ、あっ……♡」

彼にすっかり騷けられた乳首は従順そのものだった。きゅむ♡きゅむ♡と可愛がられると、すぐに体がビクついてしまう。

（って、いうか……嫉妬、って……ッ♡）

「そんな、わけ……っ♡ あっ、ん……♡」

「テメェらしくない知性のねえ返答しといて、そんな言い訳が効くか」

顔を無理やり彼の方に向けさせられ、キスをされる。

強引なキスをされるのかと思いきや、唇をゆつくり押し当てられて心臓が一瞬変な方向に飛んだ。

「リリイ」

ずるい、と思った。

（なんで……ずるいなんて、思っちゃうんだろう）

だってこんなの、「痴話喧嘩」みたいだ。自由なようで自由ではない私にとっては、物語の中にしかないものだと思ってた。

（『リリイ』って……呼ばないでって、言っただのに）

頭の中でしか文句が言えない私に、テオは何度もキスを落とした。

その間にも乳首をすり♡すり♡と優しく擦られてしまい、ぷっくり♡とした形が浮き彫りになってくる。

「やつ……♡ あッ♡ テオ……っ、ん♡」

「お前以外を抱く俺を想像して、嫉妬したんだろ？」

「ッ……！」

「リリイ」

カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡

乳首の先っぽを何度も引っ搔かれ、頬に何度も何度もキスをされる。ちゅ♡ちゅ♡♡と音がつきそうなくらい甘い唇に小さな喘ぎしか出せなかった。

特別低い声で、いつもの彼が言う。

「俺が、お前以外を抱くわけねえだろ」

「ッ………♡」

正式には、まだ抱かれてない。私たちは『子作り禁止』だから。

(なんで)

何に対する「なんで」なのか、自分でもはや分からない。でも、その言葉を真に受けてしまったらだめだと思った。愛されてるなんて、勘違いしてはいけない。

(……私の役目は、ティニアース国の王女として彼のそばにいること)

そうやって整然とまとめられた一文を頼りに理性を保とうとしても、平気で崩してくるのがこの男である。

「ここまで可愛がつてやってんのに、随分と信用がねえな」

「あッ……んっ♡」

くるくる♡　くるくる♡

テオの指が、両方の乳首を焦らすように掠めながら周回する。掠め

られるたびに「もっと」という気持ちが見え隠れしてしまい、抑え込むのに必死になった。

どれもこれも、テオのせいだ。私は、何も知らないままで良かったはずなのに。

「なあ？ 誰が、この世間知らずな淫乱乳首を開発してやったと思っ  
てんだ？」

「ひうッ……♡ ん♡ や、め……ッあ、あ♡」

「お前の一番敏感なところだって、バカ丁寧に舌でほぐしてやってん  
のに」

片方の手が乳首をくるくる♡焦らし、もう一方は徐々に下半身へと降りていく。やがて太ももに辿り着いた彼の大きな手は、すりすりと肌を撫で回す。まだ触られていない一番敏感なところ——クリトリスを焦らされているようで、腰がビクビクと動いた。

もつと触ってほしい。体が、そればかりをねだっている。

(ずるい……っ♡)

「や……だッ……♡ ふっ……♡ んっ♡」

「今更抵抗すんのか？ まあ、それはそれで興奮するけどな」

抵抗したくたつて、後ろから抱きしめられているから敵わない。鍛えられた体に、温室育ちの女が勝てるわけがなかった。勃起した乳首をコリコリ♡と弄られながら、震える膝になんとか耐えることしかできない。

「は……ッん♡ あ♡ あッ♡」

「これだけで膝カクカク♡できるのも俺のおかげだろ？ リリイ」

「リリイって……ッ……呼ばない、でっ……て、ッ♡ ん、あッ……♡」

「失礼、リイリア嬢。ご無礼をお許してください」



馬鹿にしている。でも、彼にしては珍しい敬語に何かを感じてしまっている自分もいるから悔しかった。

いつも粗暴だけれど、彼とて王族として躰けられている。上品な食事といい、言葉遣いだってお手の物なのは当たり前だ。

（もし私たちが、王族じゃなかったら）

そんな、ありもしない想像をしよう。

たまたま参加した晩餐会で出会い、雑談を通してお互い惹かれて、隠れて「こんなこと」をしていただろうか。

誰も来ない彼の自室に連れてこられ、私も彼も敬語で、声を潜めながらキスをして。

「んっ♡ あっ……♡」

「しかしながら王女ともあろうお方が、指で掴めるほど乳首を勃起させて……いつもの澄ました顔からは想像できませんね」

ぎゅむ♡

ピン♡と硬くなった乳首を親指と人差し指で思い切り潰されて  
「ああッ♡」と声が出る。くにくに♡と強弱をつけられると、それに  
合わせて腰が動いた。

「やッ、ん♡ あっ♡ テオ……っ♡」

「捏ねられるよりも、ピンピン♡弾かれる方が好きで？」

ピンッ♡ ピンッ♡

今度は両方の乳首を、爪の先で弾かれる。面積の広い彼の手のひらは、私の肋骨ごと胸を包んでいる。逃げられなくて、自然と目線が落ちた。

（あ♡ 見ちゃう♡ 指の動き見ちゃう♡ 「ピンピン♡来る♡」っ

て思っちゃう♡ 怒ってたのに♡ はしたないのに♡♡）

「テオ……っん♡ あっ♡ あ♡ あッ♡」

「はしたない声ですよ、リイリア嬢」

「んッ……♡ ふう……ッ……んっ♡」

どんどん高くなる声を丁寧な口調で嗜められて、すぐに口を閉じた。鼻で呼吸するには酸素が足りない。次第に「ふう……ッ……♡ ふう……ッ……♡」と下品な声が漏れてしまう。

（また馬鹿にされる……ッ♡）

そう思ったけれど、私と同じか、それ以上にテオも興奮しているようだった。お尻の辺りにある硬い怒張が、ごりごり♡と押し付けられる。

（テオのおちんぽ、すごい……♡ もしこれが、ナカに入ったら……♡♡）

最近はずっとそんなことを考えていた。

けれど私は、指だって入れられたことがない。彼が言うように、

しつかりと丁寧<sup>ていねい</sup>に扱<sup>あつか</sup>われてきたのだ。

でも、どうしたって想像<sup>さうぞう</sup>してしまう。彼<sup>かれ</sup>が、私<sup>わたし</sup>に向かって激<sup>げき</sup>しく腰<sup>こし</sup>を打ちつける様<sup>よう</sup>を。

(あ♡ ナカが♡)

少し想像<sup>さうぞう</sup>しただけで膣<sup>ち</sup>内<sup>ない</sup>がキュン♡と締<sup>し</sup>まってしまい、何故<sup>なぜ</sup>か涙<sup>なみだ</sup>が出<sup>で</sup>そうにな<sup>な</sup>った。

切<sup>き</sup>ない。苦<sup>くる</sup>しい。触<sup>ふ</sup>られていない膣<sup>ち</sup>内<sup>ない</sup>が勝手<sup>がた</sup>に苦<sup>くる</sup>しがっている。まだ何も知<sup>し</sup>らないはずだし、知<sup>し</sup>ってはいけ<sup>い</sup>ないのに。

「テ、オオ……っ♡」

「ん？」

縋<sup>すが</sup>るような声<sup>こゑ</sup>を出<sup>で</sup>すと、片方<sup>ひとへ</sup>の乳首<sup>ちちのこ</sup>を解放<sup>かいかつ</sup>した手<sup>て</sup>で太<sup>ふ</sup>ももの内側<sup>うちがは</sup>をすりすりされながら優<sup>やさ</sup>しくキス<sup>くす</sup>をされる。絶対<sup>ぜったい</sup>、氣<sup>き</sup>づいてる。彼は、私<sup>わたし</sup>の子宮<sup>しよく</sup>が切<sup>き</sup>なくな<sup>な</sup>っていること<sup>こと</sup>をとつくの昔<sup>むかし</sup>に分<sup>わ</sup>かっている。

(意地悪……………っ♡)

自分から彼を誘うには、抵抗があつた。

こんなにも乱れておいて、また「今更」だと言われそうだけれど、どうしても自分の役目がちらついて欲望を簡単に口にすることができない。

(でも、知らない女に取られるくらいなら……………)

太ももを彷徨う彼の大きな手のひらがどこへ向かうのか、期待しながら見つめることしかできない自分を今すぐ捨てたかった。

素直におねだりができたら、どんなに。

「リアルア？」

宥めるような柔らかかさで、今度はお腹をよしよしと撫でられる。見当違いの動作にもどかしくなった。

私の疼きを分かった上でやってるのが分かつてるから、怒りのよう

な悲しみのような何かでまた涙が出そうになった。私はこんなにも苦しいのに。

「違、うう……ッ♡」

「だから、何がだよ」

言えない私を楽しんでいるようだ。

分かってるくせに、いつもそうだ。腹が立つ。腹が立つのに、乳首の周りをくるくる♡と回られると、もう怒りよりもどかしさで頭がどうにかなりそうだった。

違う。全部違う。違うって、分かってるくせに。

「どうされたい？」

分からないふりをする彼に「国同士だっけそうだ」と思った。お互いの目論見が分かかっていて、時に知らんぷりする。優位になれるタイミングを見計らっているのだ。

その点では私も、ティニアース国も彼の手のひらの上だ。そんなか弱い国のために嫁入りしたはずなのに、一体私は何をやってるんだろうか。

「リリイ」

「っあ……ッ♡」

呼ばないでと釘を刺したはずの愛称を呼ばれて、まんまとナ力を締め付けてしまう。

相変わらず背中にはゴリゴリ♡とおちんぼが擦り付けられていた。興奮しているのは私だけじゃない。お互いが興奮して、自分の快感のことばかりを考えている。

（気持ちよく、になりたい……っ♡）

私は、すでに一つだけ「あること」を知ってしまっていた。

彼はきつと応えてくれるだろう、という確信しかなかったのだ。

（感情をぶつけても、甘えても、おねだりしても）

彼なりの優しさで、いつでも。だって、今私の乳首を意地悪く責めている男は、私に故郷のオレンジをサプライズしてくれた人と同一人物なのだから。

「……………さわ、つて……………っ♡」

「どこを？」

どこを、なんて「全部」だ。気持ちいいところを全部。

でも言葉にするのは当たり前前に恥ずかしかったし、どう言えばいいか分からなかった。

「お……………お願い……………っ」

言えなかったからそう言ったら、テオはフツと小さく笑った。

キスをされて、にゆるり♡と熱い舌が入り込む。

（気持ちいい♡ テオのキス、好き……………♡）



「はッ……んん……っ♡」

惚けるような気持ちよさに酔っていると、彼がごそごそと体を動かしていることに気づいた。

その後すぐに、何かが下着にぴと♡と当たる。その「何か」は、何故か瞬時に理解ができた。直接見たことも、触ったこともないのに。

「な、んで……ッ♡」

怖いほど反り立ったおちんぽが、割れ目の真下に挿し込まれている。下着越しでも、その妙な質感が分かった。

（『子作り禁止』……なのに……っ）

それが、この結婚の前提条件だ。ギリギリのところをうろうろしながらも、彼も今までそれを遵守してきたのにどうして。

「挿れなきゃいいんだろ」

ずり♡ずり♡と下着越しにおまんこを擦られる。造形も硬さも知っ

ていたつもりなのに「何これ」と思った。

「本当はぶちこんでやりてえけどな」

「ッあ……♡ ふ………つんう………♡」

熱くて硬いおちんぽに擦られると、膣壁がきゅう♡きゅう♡と手を伸ばすみたいに蠢いた。

どんどん本棚に追いやられていき、棚板に手をつく。すると私の体が安定したからか、テオは強引に下着を引っ張ってビリと無惨に破っていった。

「あっ♡ だ、め………ッ♡」

「挿れはしねえよ」

露わになったおまんこと太ももの隙間に、テオの怒張が入ってくる。割れ目で直接触れたおちんぽは「肉棒」と表現されるのがぴったりだと思った。興奮の塊のようなそれが、ぬちゅ♡と私の愛液と絡み

合う。

「すげ……とろつとろ……」

揶揄われるように言われ、羞恥心で息が詰まった。私に向けて、テオがカクカク♡と腰を振り始める。

「んッ♡ あ、ツん……っあ♡」

はあはあと荒い息を隠さないテオが、おちんぽをぬぷっ♡ぬぷっ♡と擦り付ける。彼が苦しそうに呼吸をするのが、異様にドキドキしてたまらなかった。

私のおまんこを使って、彼が気持ちよくなってる。私も気持ちよくさせられている。

（これが、ナカに入っちゃったら………ッ♡♡）

そんな妄想をしているとキスをされ、何も考えられなくなったから黙って舌を差し出した。

私たちの舌が絡み合い、くちゅくちゅ♡と音が鳴る。開け放した窓からは、護衛隊の訓練の聲がした。

私たちだけ、「こんなこと」をしている。まだ太陽も高いうちから。静かに。誰にも見つからないように。

「ふ……ッ♡ んっ♡ あ……ッ、あ♡」

「はあ………っは………」

（見つからなかったら、挿れても……♡）

ぐちゅ♡ぐちゅ♡とおまんこを擦られながら、情けないほど不埒なことを思った瞬間、キスを降らせてくる彼と目が合った。

「リリィ」と名前を呼ばれる。

「ッ………♡」

キスの合間に、呼ぶ必要なんてなかったはずだ。何故呼ぶんだろ。何故、その声にこんなにも切なくなるんだろ。望んだ快感は

今、与えてられているはずなのに。

彼の目を見つめる。何かを言いたかったけれど、先に口を開いたのは彼の方だった。

「何を考えてる？」

腰を押し付けながらも真剣な表情をする彼は、そんなことを問いかけてきた。

そんなの、私だって聞きたい。貴方は一体、何を考えているのか。ずりゅッ♡ずりゅッ♡と愛液に塗れ、テオの怒張はスムーズに私の割れ目を慰めた。快感に喘ぎながら、小さく答える。

「テオ、は……っ？」

どうしたら、その苦しそうな顔をやめさせることができるんだろうか。自分でも驚くほど、彼に何かをしてあげたいと思った。

ごりごり♡とおちんぽを割れ目に押し付け続ける彼は、私の首筋に

ちゅっ♡と吸い付くようなキスを落とした。

私にしか聞こえない声で、ぼそつと言う。

「お前に挿れたい」

「っ……♡」

何かを懇願するような声に、ぐうつと胸が苦しくなった。

彼がおちんぼの角度を変え、先っぽを私の入り口に擦り付けてくる。硬い怒張が、蜜壺の入り口でちゅぷちゅぷ♡音を鳴らす。それだけで、気持ちが逸るほど甘い快感だった。

彼に、何かをしてあげたい。同情とも優しさとも慈愛とも違う声で、口からひとりでに溢れていく。

「早、く………っ♡」

もう、自分から誘ったのと同義だ。

とても小さな声だったけれど、彼にしっかりと届いたようだった。

おちんぼが引き抜かれたと思ったらキスをされて、長い指が私の割れ目を前からちゅぷちゅぷ♡となぞった。

「あッ♡ ん、テオ……っ♡」

指じゃなくて、と言いついそうになるところを、テオはすぐに「指も挿れたことねえのに、挿れられるかよ」と言ってくる。

そうして、覚悟の決まった声を後ろから投げかけた。

「解してから、ぶち込む」

「あッ、くくく……っ♡」

つぶ……っ♡

胸を鷲掴むようにして私を抱き寄られると、彼の指がクリトリスを掠めながらナカへと侵入してきた。生暖かい感覚に、思わず息を呑んでしまう。

（あ……テオの指が、入って……っ♡）

「大丈夫か？」

つぷぷ……ッ♡とゆっくり侵入してきながら、テオが耳元でそう問う。

「う、ん……ッは………♡」

「せま……」

文句を言いながらも、テオはちゅう♡と頬にキスを押し付けてきた。唇と頬がほとんどくつつくいた距離で「動かすぞ」と言われ、小さく頷く。

ぐち……ッ♡　ぐち……ッ♡

「んッ♡　ん、あ……っ♡」

「痛かったら言え」

いつものぶつきらばうな口調のままやってきたキスは、心臓が小さくなるくらい優しかった。



私よりも太くて長い中指が、ナカの壁をゆっくり撫でる。ビクビク震えながら、高くなつてしまふ声を漏らした。

「あ……っ♡ ツ、ん♡」

「はッ………すげえぐちよぐちよ………」

「っあ、あ♡ テオ、そこっ………ん♡ あッ♡」

「ん………ここか？」

あまりにも腰が震える箇所があつたから言うと、ちゅ♡と「了解」というみたいにキスをしたテオは指を一本増やして同じところを擦つた。

「変なところがある」と伝えたかっただけなのに、やってくる快感が涙が出るほど気持ちよくて、私はもう甘い声で鳴くしかない。

「あッ♡ んっ♡ んんッ………♡」

「痛みは？」

一定のスピードでナカを擦ってくるテオに、小さく首を振る。二本の指の腹が、ぬちツ♡ぬちツ♡と痙攣する膣内を撫で続けた。

「あ、あつ、テオ♡ あッ♡」

「ん」

何かが徐々に溜まっていく感覚にたまらず名前を呼んだら、またキスが降ってきた。

眉間に皺を寄せた、いつもの、意地悪な顔。

「早く一つになりてえな？ リリィ」

「~~~~ツ……♡」

冗談かもしれない。でも、それでも、

(なりたい)

そう伝えたら、彼はどんな反応をするだろうか。どうせなら言つてやろうかと思った。

「…………ッ」

こんこんこん！

そうやって覚悟を決めかけた瞬間、せわしいノックの音に邪魔された。唐突な「他者」の存在に、心臓がピキンと痛くなる。

「……!？」

「テオドール様、アランです」

彼は、いつでも執事らしいキビキビした声だ。テオの広い部屋によく響いて、私の口をキュツと閉じさせた。

「入るな。急用か？」

凜とした声でテオがそう返す。

何がきっかけか分からないけれど、塙壁がテオの指にきゅ♡としがみつく。それに気づいたのか、テオは空いた指で私の下唇を撫でた。

「少し耐えろ」と言われているようだった。

「申し訳ございません。ロカイア国からの使いがみえられたので、取り急ぎご報告に参りました」

「概要だけ話せ」

（こ、このまま……っ!）

重要そうな話なのに、とすぐ近くにある彼の顔を見ると、目が合う。笑っていた。何なら、唇を重ねてくる。当然の如く、舌まで入ってきた。

「先日封書を送った件で、と公爵とその縁者の娘が来ています」

「ツん……はあっ……♡ ふ………ツ♡」

「は……っ………」

扉の向こうのアランの声に紛れて、二人して唾液の音を隠すようにゆっくり舌を絡めた。

きつと、アランはテオの声を聞き逃すまいと耳をそば立てているこ

とだろう。そう思うと声を抑えるのにも必死になったし、バレるのが怖いのに何故かテオにしがみつくのにも必死になってしまった。

アランの簡潔な報告を聞き終わると、私の唇から離れたテオは馬鹿にするような声で言った。

「つ——……………早速かよ。アポもなしに、精力的なことだな。焦ってんのか？」

そうして、当然の流れであるかのように、私の膝裏を片方だけ持ち上げる。ひょいと抱えられたかと思うとすぐに、本棚の棚板へと置かれてしまう。

（な……っ！）

声は抑えられたけれど、驚いた拍子に本棚がガタツと音を立てた。テオが小さく「ばか」と言う。そして、なんの躊躇いもなく無防備な私のおまんこに指を挿入した。

「ッ……………あ……………♡」

後ろから密着されて、本棚に押し付けられる。棚板にしがみつき、身動きが取れないままにゆぶ♡と入ってくる指に声を我慢した。

（テオの、馬鹿……………っ♡）

声を出せたら大きな声で言ってしまったところだ。でも何も言えないから、自分の口を塞いでその侵入に意識を向ける。

前には本棚、背中にはテオの厚い胸板。上げさせられた片足は、テオの足が邪魔してきて下ろせない。逃げ場なんてなかった。

（さつきより、奥まで……………ッ♡）

片足を上げさせられたせいで侵入が容易になったのか、テオの長い二本の指は行動範囲を広げた。さつき触られていなかった部分に触れられ、「ッは……………♡」と重たい吐息が漏れる。

「此度の結婚で、少なからず焦りはあるかと」

「だろうな」

「にちッ♡にちッ♡と、二本の指の腹がいやらしい動きで前後する。

（だめ♡　だめ♡　そこずつとごしごし♡されたら♡　声、が……っ♡♡）

奥から入り口までの膣壁を押しながら撫でられているだけなのに、愛液の音が鳴って恥ずかしい。やめて、と言えない代わりにまた首を振った。

必死で声を抑える私をよそに、アランはキビキビと続けた。

「牽制のつもりなのか、『リイリア様にも是非ご挨拶を』とのことで」

「ッ、ん……！♡」

（私の、名前………っ♡）

自分の一部とも言える名前なのに、唐突に、こんな場面に出てきたからだろう。膣内がきゅう♡と絞られて、彼の指の形が明瞭になるく

らいだった。背後にいる彼が笑っている気配がする。

かと思えば、なんの合図もないままぐちゅッ♡ぐちゅッ♡とナ力をかき混ぜられてしまう。もう口を閉じることにしか意識が向かない。

(あ♡ なん、で♡ だめ♡ なんて♡ ナ力敏感になってるのに♡ そんなにぐちゅぐちゅ♡されたらもう♡)

「随分分かりやすい動きだな。まあ、分かりやすさ含めてのパフォーマンスだろうが」

「あ……ッ……♡　　ゝゝゝッ……は、あ………ッん♡」

ぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっ♡♡

一から百まで冷静な声色なのに、テオの指の動きは真逆だった。何も言われていないのに「イけ」「早く」「今ここで」と言われているようだった。

(だめ♡ だめ♡ ほんとに♡ テオ♡ だめなの♡ もうだめ♡



ナカが、どんどん小さく、なつて……ッ♡♡♡

「ロカイア国としては、いの一番に俺の子を孕ませたいところだろうな」

「ッ………♡♡」

そのロカイア国が狙う、「テオの子どもを孕ませる」という行為に近しいものを、今やってしまっている。だというのに、アランの話もどこか遠いもののように思えた。ティニアースのことを思えば、そんなことも言つてられないのに。

（でも、今はそれどころじゃ………っ♡）

スピードもリズムも全く変えられていないのに、順調に絶頂へ導かれている。

程よい指の圧でぬちゅぬちゅ♡と膣肉を撫でられるたびに、ナカが収縮してテオの指を邪魔していた。けれど、テオの指はそれすら掻き

分ける。無理やり。強引に。

体重を支えている片足がガタガタ震え、ほとんどガニ股になってしまっていた。棚板に上げられている足も震えて、頑張らないとへたり込んでしまいそうだ。

でもそうやって足を踏ん張っていると、快感を溜め続けているナカの我慢が効かなくなる。もう決壊寸前だった。

(お♡♡♡だめ♡♡♡だめ♡♡♡だめ♡♡♡もう♡♡♡キチャウ♡♡♡キチャウ

♡♡♡テオ♡♡♡テオ♡♡♡)

「どうせその同行してきた女も未婚なんだろうよ」

「はい、適齢期とお見受けします」

「連中には俺がよっぽど好き者に見えるらしいな」

皮肉ばかりも吐きながら、テオは指のリズムを一切変えない。私のイイところをぐちゅ♡ぐちゅ♡と掻き鳴らしながら、冗談混じりにこ

う言った。

「俺には最愛のリイリアがいると言うのに」

「~~~~ツ……ふ……………~~~~ツツツ♡♡♡」

ビクビクビクツ♡♡

イった瞬間、とてもはしたない格好をしていたと思う。ガニ股のまま腰が落ちて、でも快感で腰が反ってしまうから前に突き出すような形になって、嬌声を飲み込むためにだらしない表情で顎を上げて。

(ツお……♡♡ しゅごい……っ♡ アランの近くなのに……おっきいの……きたあつ……♡♡)

声を耐えたままびくんッ、びくんッと快感を飲み込んでいると、何も知らないアランは問う。「最愛のリイリア」という言葉も、ただの皮肉めいた冗談だと捉えたらしい。

「して、如何いたしましょう?」

「アポも取らねえ傲慢な外交にこつちが合わせる必要はない。気長に待たせておけ、そのうち行く」

「承知いたしました。失礼致します」

アランにとっては、今テオが「何を」しているのかなんてどうだつていいのだろう。命令を従うだけ、みたいな靴音がすぐにコツコツと遠ざかって行つた。安堵で少し呼吸が楽になる。

(やつと……行つてくれた………っ♡)

イッたばかりで朦朧とする頭で息を荒くしていると、ナカに入つたままのテオの指が再びぬッ♡ぬッ♡と動き出した。驚いて「な、んでっ♡」と声を出すと、意地悪な声が降ってくる。

「声抑えきれてねえんだよ、アランに聞かれたらどうする」

「だ、ってっ……♡ あッ♡ んっ……テオ、が……♡」

「俺が？　なんだ？」

ぬっち♡　ぬっち♡　ぬっち♡　ぬっち♡

さっきまで膺壁を撫でるだめだった指たちが、ナカをかき混ぜるよ  
うに大きく動く。水かきをしているような仕草で、おまんこから卑猥  
な水音が響いた。

「おッ♡　だめっ♡　そんな、にッ……あ♡　んっ♡」

「バレそうだったのに雑魚まんこきゅうきゅう♡締め上げやがつて。  
処女のくせに特殊な性癖に目覚めてんじやねえよ」

「違う、も……ッん♡　あ♡　あッ♡」

「乳首おっ勃ててぐっちよぐちよに濡らしてただろうが」  
ぐりい♡

私の体を後ろから抱きしめるテオの指が、片方の乳首を捻りあげ  
る。唐突な快感に悲鳴のような喘ぎが飛び出た。

「ひうつ♡　ん♡　乳首捻っちゃ、らめえ……ッ♡」

「またイくのか？ 処女のくせにナカイキが上手いな、リイリア。手伝ってやるよ」

乳首をぐにぐに♡と捏ねられながら、おまんこをぐっぽぐっぽと  
かき混ぜられる。さつきと同じように収縮していく膣に、どんどん期  
待が膨らんだ。

（すごい♡ 乳首虐められながらナカされるの♡ 気持ちイイ♡♡  
またイく♡ イっちゃう♡ クる♡ おっきいのが♡♡ もうちよつ  
とで♡♡）

「つと……その前に」

「いッ、えっ……?!」

ピタッ、とテオの両手が止まって狼狽える。もう少しで得られるはず  
だった大きな快感の波はさあつと消えていって、その落差で思わず  
泣きそうになったほどである。

（なんで……止まって………ッ！）

「俺に、言うことがあるな？」

ずるっ♡と指まで引き抜かれたかと思えば、テオは乳首とクリトリスをこり♡こり♡と優しく捏ね始めた。

いい加減、私も学習している。すぐに「焦らされてる」と思った。

「あ……っ♡ い、言うこと……♡ って……ッ♡ ん♡」

「嫉妬したんだろ？ リリイ」

「………!!」

かあつと顔から耳まで、一瞬で赤くなってしまったのが自分でも分かった。たった一言でこうも体温を変えられる人体に驚く。と、いうか。

（そ、その話題はもう終わったものかと………！）

「ッは………可愛い反応だな、おい」

「ひ、う……ッ♡」

真っ赤になった耳に、テオの唇がちゅ♡とひつつく。その仕草も恥ずかしかつたけれど、それ以上に彼から初めて発せられた「可愛い」の破壊力が凄まじい。

（心臓が……馬鹿になりそう……っ♡）

「も、やめ……ッ♡ んっ♡」

「やめていいのか？」

「ッ……♡」

「せっかくここまで解れてきたのに、お前のつまらねえプライドで中断するか？　なあ、リリイ」

問いながらも、テオの指はくり♡くり♡と乳首とクリトリスを弄っている。優しすぎる動きにまんまと焦らされて、私の子宮はシクシクと泣いているようだった。



「んッ♡ あ……ッふう……………っ♡」

「認めたら、挿れてやるよ」

「う、あ♡」

（挿れる、って……♡）

私の思考に応えるように、テオの怒張がお尻の辺りにごりっ♡ごりっ♡と押し付けられた。

もう、一つしか考えられない。

耳元で、彼が囁く。

「いつまで、俺に我慢させるつもりだ？」

「ひあ♡」

人間の体が、こんなにも硬くなるなんてあり得るんだろうか。そう不思議に思ってしまうくらいバキバキ♡に反り立ったおちんぽを知らしめるように、テオがぐりぐり♡と腰を押し付ける。

「早く言え」

「ッ、あ……♡」

「言ったら、お前のイイところ探しながら奥まで打ち付けてやろうな」

まるで、もう「言う」が確定しているみたいな優しい言い方だ。「頑張ったらご褒美をあげよう」と促す大人のような。

「……ッ、は……♡」

逆らえない。どうしてこんなにも逆らえないんだろう。目で射抜かれてるわけでもないのに、耳元で響く低い声に腰砕けだった。

「……ま、した……♡」

「あ？ 聞こえねえよ」

今度は声にまで射抜かれて、ぞわぞわと背筋が震えた。けれど相変わらず仕草だけ優しい彼の指の腹は、膨れた表面を刺激すぎないよう

にくにつ……♡にくにつ……♡とクリトリスを弄る。

「ひッ……♡ あ、し、しました♡ 嫉妬、しました……ッ♡ 側室つて、聞いたたら、ん♡ 頭が、沸騰するみたいにな、……つて♡♡ あッ……あッ♡♡」

隠したかった心情を吐露すると、クリトリスをぎゅむ♡と摘まれて軽くイってしまった。

次の瞬間、

「ひあッ」

きゅうん♡と絞られる膣を味わう暇もなく、お姫様抱っこでひよいと抱え上げられてしまう。

「え、うえ……っ?!」

テオは、体重なんて感じていないかのように安定した足取りで私をベッドまで運んだ。かと思えばどさっと放り投げられ、油断しきった

声が出る。

私を押し倒し、何かに追われているように怖い顔をしている彼は上半身の服を脱ぎ捨てた。次いで、ベルトにも手をかけていく。何もかもが素早く、私はそれを呆然と見つめることしかできなかった。

そうしてぼるんっ♡と力強い反動をつけて出てきた怒張に、ひゅっと息が止まる。

テオの興奮を示した形が、少し怖くなった。「こんなの入るわけがない」とどこかで思いながらも、一方で「やっ」とも思う。

「ん……………ッ♡」

黙ってキスをしてくるテオは、黙って私のドレスをたくし上げる。ゴソゴソとまさぐられて、どんどん心臓がうるさくなっていく。

（やっ。やっ）

そう繰り返す脳内に応えるように、テオの先っぽがにちゅ♡と私の

入り口を擦った。ドクン、と心臓が大きく跳ねる。

「あッ……テ、オ………っ♡」

「なんだよ」

「あ……あッ………あ、あッ………っ♡」

湿った入り口から、にゅぷ……ッ♡と何かが侵入する。指よりも圧倒的に大きい質量に口を閉じられないでいると、テオは怒ったように言った。

「俺が、どんだけ我慢してやっただと思ってる？」

（そんなこと、言われても………っ♡）

私のせいであるかのように言われて、頭ではそう反論しても口が追いついてくれなかった。馬鹿みたいにぽっかり開けたまま、ずぷぷ……♡とゆうっくり入ってくるおちんぽに、馬鹿みたいに声を漏らすしかできない。

「あ、あ、あッ……♡」

「力抜け」

襲ってくる圧迫感を真正面から受け止めてしまう私に、テオは言いながらキスを落とした。熱い舌と息のおかげで、少しでも楽になる。だから「優しい」と思ったし、寄りかかるように舌だつて絡めてしまった。

「ん……ッ、は……♡」

けれど、その合間を縫ってまでテオの怒張はゆっくりゆっくり私を貫いてく。ずずず……ッ♡と侵食されているような圧に、やっぱり私は馬鹿みたいな声を抑えられなかった。

「あつ、あッ……♡」

「痛いかな？」

ゼロ距離で私の唇を震わせながら、テオが聞く。その唇に縋りなが

ら首を横に振った。

正直、よく分からなかった。痛いとも気持ちいいとも言えない。とにかく、大きい何かが「入っている」し「刺さっている」。自分のナカに他人のものが入っている感覚は、私に呼吸の仕方を忘れさせるようだった。

「はあ……ッ♡ はっ………♡」

（これが、男の人の……っ♡）

この硬くて太いモノが、何故かテオの一部とは思えなかった。もつと感情的な「何か」のように思えるし、それが入ってきているという事実が何より不思議だった。

知らない感情が、込み上げてくる。私の感情の中で、一番静かにしていたはずの感情。

「あー………すげ………」

結合部を眺めながら、テオが呻く。何がすごいのかは分からなかったが、気持ちがいいのだろうということとは想像できた。

（つていうか、どこまで……入って……っ♡）

自分の予想していた最終地点はとうに過ぎていた。こんなに奥まで届くことを予想していなくて、息が苦しくなる。

「テ……オ………っ♡」

ぎゅ、とシーツを掴むと、その手を奪い取られて絡められた。私の指の間に収まる彼の指が太くて、違和感がある。

自分と彼の違いを、今、まざまざと見せつけられている。私自身が知らないところを蹂躪しながら、彼が見せつけてくる。

「リリイ」

低い声も、柔らかい唇も。

「ッあ………♡」



(今、こっん♡って……………ッ♡)

私の最奥まで行き着いたような感覚がして目を合わせると、テオが私に覆い被さるようにやってきてキスをした。

「入った……………あー……………リリイ……………」

「う、あ♡」

胸も揉みしだかれ、ついでにと言うように乳首をコリコリ♡倒される。勝手に締まったナカは、ぎゅ♡と彼のおちんぼの形を鮮明にさせた。

「ッん♡ あ♡」

「っ…………締め付けんな、食いちぎられる……………」

「そ、んな…………ッ♡ だ、って♡」

「痛くしねえから。力抜け、息しろ」

「ん…………っ♡」

親指で頬をすりすりと撫でながら、テオがキスをしてくる。落ち着け、と言われているような仕草にちゃんと落ち着いてしまった。

同時に、少し恐ろしくなる。知るつもりもなかった彼のいろんな一面を、徐々に知ってしまっている。一人の人間としての輪郭が、どんな「既知」になっている。

急に意地悪く笑うのだってそうだ。

「ハッ……キスだけでナカ締まってるな？」

「っ♡ それ、は……ッ♡」

「俺を腹上死させる魂胆か？」

またキスをされる。

テオにとっては、そんなにも気持ちのいいものなのだろうか。私にはまだよく分からない。でも、次いでやってきた彼の声は、我慢が効いていないような熱っぽさがあつた。

「あー……やっぱ、お前が悪いだろ」

だから、心臓がキュツとなる。

「へ、えっ？ 何が……」

「動くぞ」

「えッ……あ、あッ♡♡」

一方的に私を悪者にしたテオは、私に覆い被さったままゆっくりと腰を前後させた。ゆさゆさ♡と体を揺すぶられているだけなように感じるのに、ナカのおちんぼは確かに動いて肉壁を分け入っては、引きずるように出ていく。

ずち……ッ♡ ずち……ッ♡ ずち……ッ♡

(あ♡♡ すごい♡♡ おっきいの♡♡ お腹のナカで、動いて……っ

♡ ずちゅずちゅ♡♡って♡♡ 擦ってくる♡♡)

「あッ♡♡ あっ、んう♡♡」

「ッうあ……………」

吐息に混じって聞こえた、彼の喘ぎを可愛いと思ってしまった。

二人して性欲をぶつけ合ってるだけなのに、どうしてこんなに心が通ったような気がしてしまうのだろうか。

気持ちいいのか痛いのかは相変わらずよく分からない。けれど、どんどん何かが迫り上がってきて、彼の名前を呼ばずにはいられなかった。

「あ、テオ♡ ん♡ て、お♡」

「黙ってろ」

すると何故か叱られて、黙らせるように唇で塞がられた。彼の長い髪の毛が降ってくる。ゆさっ♡ゆさっ♡と腰を動かしながらキスをしてくるテオに返すみたいにな、絡めた指をぎゅうっと握る。

「ッ♡ ふっ……………あ、あ、あっ……………ッ♡」

「あークソ、止まんね……」

苛立った様子でそう言い、テオは上体を起こした。絡められていた指が離れていき、その手は近くにあった紐を掴む。慣れた手つきで、テオは自身の髪の毛を結んでいった。

その最中も、彼の腰は止まらなかった。するすると髪を一纏めにしながらも、腰は私に向かって優しくとっ♡とっ♡を繰り返す。

「あっ♡ あ♡」

彼が髪の毛を綺麗に纏め上げると、とっ♡とっ♡のスピードは徐々に上がっていった。腰を軽く掴まれて、短いストロークで奥だけをノックされ、その度に声を上げてしまう。

「やつ、ま♡ って、あっ、あッ♡」

「痛くはねえんだろ？ 可愛い声出てんじやねえか」

（可愛い、って♡ また……っ♡）

気軽に投げかけられた言葉に逐一反応してしまうから、悔しい。彼にとっては特別な意味なんてないかもしれないのに。

「あー……エッロいクリだな、おい」

「あッ、や、クリトリス、だめっ♡ あ、あっ♡」

とんっ♡とんっ♡と軽い腰つきで奥を叩きながら、クリトリスをコリコリ♡と親指で押し潰されて腰が反る。

上体を起こしたままその様を見下ろすテオは、目を細めて笑っていた。チラリと光る金色の瞳で、一瞬だけ出会った日のことを思い出した。

でも、すぐに忘れてしまう。ぬちゅ♡ぬちゅ♡と擦れ合う快感が、じわじわと私の子宮を襲っていたからだ。

（なんか……気持ちよくなってきた、かも……っ♡）

「あ、んッ♡ テオ♡ あっ♡」

「ん」

「あ……ッ、あ♡ 気持ち、い……ッんむ……♡」

テオの腕を掴んでそう言うのと、すぐにテオが体を寄せてきてキスをした。かと思えば、さっきまで同じリズムを繰り返していた腰がピタリと止まる。

「何で」と問う前に、彼の苦々しい声が荒い息と一緒に口内へ溶けていく。何もしていないのに、彼はまた私を悪者にするのだ。

「馬鹿、出るだろうが」

ピストンの代わりにと言わんばかりに舌が襲ってきて、二人してはあはあと舌を絡めた。私は彼の首にしがみついて、彼は私の手首を掴んで、くつつき合って、酸欠だけを避けるように。

「はあ……っ♡ んん……♡」

「は……っ、………はあ………」

「ん、ツ……♡ ふぁ……♡ あっ……あ、あッ♡ ああっ……♡」  
そして、またゆっくりと動き出す。ぬちッ♡ぬちッ♡とこれ以上なく密着した、卑猥な音がした。お互いの形を刷り込ませみたいに、  
味わうみたいに。

（なんだろう）

「これ」は、なんだろうと思った。

テオの頬を手のひらで包むと、じんわり暖かくて胸がチクチクした。私の手のひらに誘い込まれるように、テオがまたキスを降らせてくる。

ちゅ、ちゅ、と可愛いキスと、れろ♡くちゅ♡ちゅぷ♡と可愛くないキスが、たくさん。

（「幸せ」、とか……）

表現するのなら、そんな言葉がぴったりだと思った。私と彼の間



に、あるはずのなかった言葉だ。

(そのつもりで私は、ここに)

本来の意図からかけ離れた現実だ。薄らと今までの人生を思い出している、キスの合間で何故か彼としつかりと目が合ってしまった。

自然と目元が緩んで、照れ隠しに小さく笑ってしまう。

私の人生に、こんな風に彼が潜り込んできているのがあまりにも荒唐無稽に思えて可笑しかった。

「ん、うっ♡」

私の心情とは裏腹に、また可愛くないキスが降ってくる。

私の両手首をベッドに縫い付けたテオは、私の口内を舌で犯しながら小さく言った。

「声、我慢しろよ」

「ッえ……あ♡ あ♡♡」

一番奥を小さくノックし続けていたおちんぽが、ずろお♡と入り口まで引き抜かれる。「長い」と思ったも束の間、ギリギリのところに入り口から抜けなかったおちんぽは、再びその質量を私のナカに押し付けてきた。

ずちゅんッ♡

「い、おッ♡♡」

端から端まで太さと長さを分からされて、意図せず下品な声が漏れてしまう。

（な、に……これ……っ♡♡）

スムーズに入ってきたおちんぽは、敏感になった私の膣内全てを蹂躪しながら奥をこっんッ♡と叩いた。その快感に驚いている暇もなく、またずろおッ♡とおちんぽが抜けていく。

「ま、ッ♡　っ♡♡」

とちゅんッ♡♡

待つてと言ったところで、この男が待つてくれるはずもない。

何なら私のナカが思ったよりもスムーズに受け入れてしまったせい  
か、あからさまにスピードを増していった。

バチュッ♡ バチュッ♡ バチュッ♡ バチュッ♡

「あ、あつ、あッ♡ なんつで……♡ ぐ、あッ♡ 急、にいつ♡」

「全くりイリア嬢は……男を煽る術をさすが心得ておられる。まさか  
無自覚などとは言いませんよね？ ……なあ？」

慇懃無礼に言われても苛立ちはなかった。何なら頭の中は「おちん  
ぽきた♡」「気持ちいい♡」でいっぱい、テオの心中なんて推し量  
る余裕すらない。

手首を掴まれながら、こちゅんッ♡こちゅんッ♡と容易く奥まで何  
度も何度もノックされる。彼の動きに合わせて、ギシッ、ギシッと天

蓋付きベッドが大袈裟な音を立てた。

(あッ♡ あッ♡ しゅごいつ♡ 奥までキてるっ♡ おちんぼしゅ  
ごい♡ 何これ♡ だめ♡ だめ♡ おちんぼ気持ちいいよおっ  
♡♡)

「ッ、あ♡ あ、あんっ♡ テオ♡ テオおっ♡」

「声」

反り立ったおちんぼで入り口から奥まで擦られるたびに、誰かに縋り付きたくて声が出た。

そうやって開いた口に、彼の太い指が入ってきて舌を軽く掴まれる。苦しいのに、跳ね上がった心臓は何故か快感に変わっていた。膣壁がきゅ♡と小さくなる。

「拳匂、舌掴まれて締め上げる淫乱ときた」

「~~~~ッ……♡」

蔑んだ声で言われ、淫乱を証明するように甘イキをした。舌を掴んでいる指を噛んでしまうと、彼は笑う。

「はッ……お前のイイところ探すつつてんに……. っただけ煽れば気が済むんだよ」

噛んだことには何も言われなかった。むしろ、気づいてすらいらないような面持ちで、ずちゅッ♡ずちゅッ♡と腰を叩きつけられる。

「ツ、ひ、う♡」

「初めてのくせにイイ顔でよがりやがつて。ド淫乱」

「ひ、ひわ、うう……ッ♡♡」

頭では「違う」と言っただけなのに、舌を掴まれているせいで上手く喋れない。でも、テオにはちゃんと伝わったようだった。

「違う？ どこがだよ、きゆうきゆう♡締め上げて搾り取ろうとしてんじやねえか」

「や、やらあ、あッ♡ つ、へお♡ やらあッ♡」

「……だから、煽ってんじゃねえよ」

ちゅう♡と唇に吸いつかれる。声は、怖いくらい「男」だった。

「こっちだつて余裕ねえんだからな」

パンッ♡ パンッ♡ パンッ♡ パンッ♡

（煽ってなんか、ない、のに♡♡♡）

私の体を全て覆ってしまいがちながら、テオがおちんぽを打ちつける。

快感で膨れた膣壁の凸凹を擦られると、解放された口から甘い声がどうしても漏れた。呼吸を止めるようにしてなんとか抑えているところに、テオが顔を近づけてくる。

「どこがイイ？ リリイ。奥か？ 乳首か？ それとも全部？」

私の小さな声を、聞き逃すつもりがないのだろう。そう思うと、近づいたテオの背中に何故か手を回してしまった。

お互いの荒い息がノイズになってくれている気がして、嘘偽りない言葉が口から出た。誰にも聞かせられない、精査なんてしない言葉だ。馬鹿みたいに。

「ぜ、全部……っ♡ 全部、気持ち、イイっ♡ んッ♡ あ♡」  
「ん……」

妙に素直な私の言葉を、テオは揶揄わなかった。真正面から受け止め、応えるように短い返事だけをする。そしてすぐに私にキスをした。彼は、体を密着させたままぱちゅッ♡ぱちゅッ♡と腰を動かす。

「あっ、あ♡♡ テオ♡♡ テオっ♡ んあッ♡ ああっ……♡♡」  
「リリー」

拾うのもやっとなくらい低い声で呼ばれ、ちゅ♡♡と軽やかなキスをされると、膣壁がきゅううう♡と狭まっていった。彼の興奮の形が、どんどんはつきりしていく。

(だめだめだめだめ♡　もうイク♡　イク♡　イク♡　イク♡　テオ♡　テオ♡　テオ♡)

「ッ あゝゝゝ…:…:…:♡♡　ゝゝゝゝッ ひ…:…:…:♡  
ぐうッ…:…:…:ゝゝゝッ♡♡♡」

大きな声を出せないから、獣のような呻き声を漏らして果てる。

びくッ♡びくんッ♡と激しく痙攣する子宮に、目の奥がチカチカしていた。

(お腹…:…:…:♡　壊れたみたいに、痙攣してるっ…:…:♡♡)

「あー…:…:…」

「ひ、う、あッ♡」

(ま、たあ♡♡)

テオもまた獣のような声色だった。低く、震えるような声のまま、  
いったばかりの膣に向かってバチュッ♡バチュッ♡バチュッ♡と獣の



ごとく腰を動かす。

大きく波打つナカは、膨張した男性器をそれでも受け入れた。と言うより、受け入れるしかない。収縮の瞬間を狙ったかのようにずりゅッ♡ずりゅッ♡とこじ開けられているからだ。終わらない快感に、背中が徐々に浮いていった。

「あッ♡ あ、あッ♡」

その浮いた背中に、テオの腕が差し込まれる。その支えでさらに浮いた腰と背中のでいで、ナカのおちんぼは少し角度を変えた。

ナカからお腹を撫でるように、おちんぼがずりずり♡♡と往復している。

♡ (あ♡ だめ♡ これだめっ♡ だめなところずりずり♡されてるっ♡ イく♡ また♡ すぐイっちゃう♡♡)

「ああ……ッん、む♡ ん♡ んっ♡ んう……ッ♡」

濁った声が出てしまうのを、彼の手がまた塞いでくる。今度は大きな手で口全体を覆われ、物理的に呼吸が苦しくなった。

軍人らしい筋肉を纏った彼に口を塞がれながらおちんぽを叩きつけられる私の様子は、ひどく「可哀想」なものだろうと思った。私は乗馬すらできないし、本だって三冊持つのがやっとだ。腕の太さは倍違う。

(テオ♡ テオ♡ テオ♡♡)

なのに、頭の中は快感に支配されている。とてもじゃないけれど自分のことを「可哀想」なんて思えなかった。

呼吸の権利を奪われていても、それすら快感に変わってしまっていた。

(お腹ずりずり♡って♡ おちんぽ激しい♡ 苦しい♡ 苦しい♡ 苦しいのに、おまんこ締まってる♡♡ イってる♡♡ イってる♡♡ イってる♡♡)

♡♡ 甘イキ全然止まんないっ♡♡

「あー馬鹿……締めんな……っ」

苦しそうにそう言いながらも、テオはパンパンパン♡♡と腰を打ちつけるのをやめなかった。片手で軽々と私の腰を持ち上げながら、膣の上の方でオナニーするかのようにおちんぼを擦り続ける。

（イってる♡ ずっとイってる♡ やだ♡ 怖い♡♡ やだ♡♡ やだなの♡ テオ♡ テオのばか♡♡ テオ♡ テオ♡♡）

何にしがみつけばいいか分からないほどの快感で、途中から頭の中で彼の名前を呼ぶことしかできなかった。

今この瞬間、頼れる人は彼しかいないように思える。

私を見て、私の体を支え、私の感情を受け止めてくれる、唯一の。

「は……リリイ………ッ」



「ッあ~~~~」

「は……ッ♡ はあ………は……ッ♡」

半透明の体液に濡れたお腹を見つめながら、呆然と思う。

（……セックス……しちゃった………）

感情が、ついてきてくれない。「セックスをしてしまった」と言う事実だけが何度も繰り返されて、それ以上思考が進まなかった。

「は……」

「んん………っ♡」

息が荒いままのテオがキスをしてくるから、目を瞑って受け入れる。リップ音のない、押し付けるようなキスだ。

（前の月経の日から考えても、大丈夫だとは……思うけど……）

ナカに出されていないとはいえ、どうしても妊娠の可能性がチラついた。

私の心中を察したのか、はたまた自身も同じ不安を抱えたのかテオは言う。業務連絡のような抑揚のなさだった。

「最悪の場合は」

「えっ……………」

「部下に処理させる」

（『最悪』『処理』）

たった二つの単語がとても鋭利で、胸の最奥に傷がついてしまったかのようにじくじく痛んだ。血管が機能を失ったみたいだ。手の先から、じんわりと冷えていく。

（傷つく必要は、ないはずなのに）

『最悪』『処理』『最悪』『処理』『最悪』『処理』。妊娠。赤ちゃん。

ん。幸せな結婚。夫婦。最悪。処理。

彼の言葉を頭の中でぐるぐると反芻しながら、連想される言葉が勝

手に並べられていった。

至極冷静で、論理的で、無機質な言葉は彼らしいとすら思う。なのに。

「だから」

そんな彼に、暖かくて優しいキスを落とされる。今度はちゅ、と小さくリップ音を貼り付けた彼は、まるで幼い子どもを慰めるかのように静かに言った。

「何も、心配しなくていい」

どこまでも業務連絡のような口調なのに、言ってることは優しいからやっぱりが頭が混乱しかける。どの地点かは分からないけれど、私はどこかで明確におかしくなってしまった気がした。

私も彼も、一体何がしたくて、何に動かされて、何をしてしまったのだろう。

ふと目に入った彼の指には、しっかりと私の齒形がついていた。指輪ひとつない指を、ほんの少しだけ恨めしく思った。

（続く）



サークル名：オンリーユー

著者：水瓶

読んでいただき、ありがとうございました！